

IS学園の劣等生

人斬り抜刀齋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インフィニットストラトスと魔法科高校の劣等生クロス

司波達也が妹の深雪やエリカ達と登校していると突如空間に出来た穴に達也が吸い込まれ気がつくと、インフィニットストラトスの世界だった。

そしてひよんな事からISを動かしてしまいIS学園に入学する事になった。

目次

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	入学編	第1話	序章
56	49	43	36	31	26	17	13	5		1	

第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話
152	146	138	130	124	113	105	94	85	73	64

序章

第1話

設定

人物主人公

名前：司波達也（声：中村悠一）

年齢16歳

生年月日2079年4月24日

国籍日本

特技：分析、CAD調整、武術

性格冷静沈着、クール、妹の深雪を溺愛している（所謂シスコンだが本人は自覚していない）

所属国立魔法大学付属第一高校通称第一高校1年E組と日本国防軍第101旅団独立魔装大隊の戦略級魔法師・階級特務大尉 家族構成 母親：司波深夜 父親：司波

龍郎 妹：司波深雪 叔母：四葉真夜

この時の達也は来訪者編の吸血鬼事件の後の頃

達也が使用出来る又はISの世界に来て出来る様になった魔法（他のキャラの魔法が使える）

精霊の眼、分解と再成魔法、術式解体、自己再生式、フラッシュ・キャスト、仮想魔法演算領域、バリオン・ランス、飛行術式、キャストジャミング、マルチスコープ、高速滑走、跳躍強化、安定着地、高速走行、壁面走行、水平飛行、多重干涉、演算補助、圧縮展開、簡易起動ループレキャスト、誘導補助、並列処理

ニブルヘイム、地獄の業火、氷炎地獄、リニア・サンド・ストーム、凍火、フォノン・メーザー、能動空中機雷、フアランクス、領域干涉、流星群、魔弾タスラム、パンツァー、這い寄る雷蛇、ドライブリザード、地雷源、エクスプローダー、衝撃、吹き飛ばし、自己加速術式、ヘビーマタルバースト、深淵、サイオン・ウエーブ、エア・ブリット、サイオン・ブリット、鎌鼬、サイオン・ウエーブ、雷童子、高周波ブレード、エア・アーマー、閃光、障壁魔法、叫喚魔法などの魔法が使える様になった。

突然ISの世界に飛ばされひよんな事からISに触れ起動してしまいIS学園に入学することになる。

毎日欠かさず朝のトレーニングをする九重八雲の体術をやり時々剣道場で素振りの稽古をする。

達也は赤子の時から魔法を使わない武術など教わっていたためプロ顔負けの実力を

持っている。

筆記試験で全科目は断トツトップな程純粋な学力を有している。

オリジナル達也の専用機 「トライデント」（名前は特化型カスタムメイドCADから取った）

篠ノ之東に気に入られ造ってもらった達也の専用機 武装はCAD（シルバー

ホーン）をモデルに設計されサイオンを流すと魔法が発動する。

武装：シルバーホーンのISバージョン、日本刀型CAD、少銃型CAD

色：黒

性能：第三世代

待機形態：腕時計

準主人公

名前：織斑一夏（声：内山昂輝）

年齢15歳

生年月日2007年9月27日

国籍日本

特技：家事全般

性格：お人好し、面倒見がいい、姉である千冬を尊敬してる（周りからはシスコンだ

と思われるが本人は否定している)

所属 I S 学園 1 年 1 組

家族構成 両親：行方不明 姉：織斑千冬

幼い頃両親に捨てられ以来姉である千冬が面倒を見てもらっていた。

朴念仁で事あるごとに女子を怒られる。小さい頃ヒーローに憧れ誰かを守る事に

憧れを抱いていた。「世界初の男性操縦者」 転入して来た達也の関係良好

一夏の専用機「白式」

倉持研究所で造られた一夏の専用機

武装：雪片式型、零落白夜

色：白

性能：第三世代

待機形態：ガントレット

入学編

第2話

吸血鬼事件から数日が経ち今俺と深雪そしてエリカ達と一高に向かっていた時

「おはよう達也くん深雪」

「よおおはよう達也深雪」

「おはよう達也深雪さん」

「おはようございませす達也くん深雪さん」

「おはよう達也さん深雪」

「おはようございませす達也さん深雪」

「ああ、おはよう」

「おはようございませす皆さん」

エリカ、レオ、幹比古、美月、雫、ほのかが挨拶をしてきて達也と深雪を返す

「相変わらず仲良いね二人共」

「まあ、エリカたら茶化さないで」

茶化すエリカに照れる深雪

暫く歩いてみると

「おい、何だあれ？」

とレオがあるものに気づく

「!？」

空間に妙な穴空いていたのだ

「何でしようこの穴」

「さあ」

「お兄さまこれは、」

「分からない唯妙な何かを感じる」

すると穴から皆を吸い込もうと引き寄せ

突然の事近くに居た達也が真っ先に吸い込まれる。

「お兄さま!!？」

「深雪近づくな！」

「おいこのままじゃ達也が吸い込まれるぞ」

「達也さん!!」

達也は必死に抗うが抵抗も虚しく穴の中に吸い込まれてしまった。

そして達也を吸い込んだ穴は消えてしまった。

「お兄さまー」

と叫ぶ深雪この日達也はこの世界から消えた。

所変わってここはI S学園の敷地内

「今日もいい天気ですね織斑先生」

「ああ」

I S学園の教師織斑千冬と山田真耶が敷地内を歩いていると

「織斑先生、あそこに誰か倒れています」

「何!?!」

そこには十代位の男性が倒れていた。

「大丈夫ですか!!?!」

「山田先生早く保健室に運ぶぞ」

「は、はい」

こうして達也は保健室に運ばれた。

——目覚め——

「()は・・・」

「目が覚めたかここは、保健室だ」

「大丈夫ですか」

と黒髪に黒いスーツ姿の女性と眼鏡を掛けた緑髪の女性が現れた。

「いえ、問題ありません。所で何故俺が保健室にいるんです（この黒髪の女性の声が百合子さんに似ている）」

達也は何となく自分の義母である司波百合子と声が似てると思った。

「そうか、それは良かった君がI S学園の敷地内に倒れていたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。（俺は、あの穴に吸い込まれた筈、一体どういう事だ？）」

「礼には及ばない。私はこの学園で教師をしている織斑千冬だ。」

「私は山田真耶です。同じくこの学園の教師です。」

織斑千冬が挨拶してきたので自分もする。

「自分は、国立魔法大学付属第一高校の司波達也です。」

「国立魔法大学付属第一高校？聞いた事ない学校だな。山田先生聞いたことありますか。」

「いえ、私も聞いた事がありません」

「どこにあるんだ？」

と返ってきたのは信じられない事だった。

（魔法科高校を知らない!!!）

「すまないが事情聴取を取らせてもらおうが」

「分かりました」

取り敢えず達也は保健室を出て織斑千冬と山田真耶の後を付いて行き取り調べ室に入る。

「所で先の続きだが国立魔法大学付属第一高校はどこにありどういう学校何だ」

「失礼ですが本当に知らないですか？」

「ああ」

達也は考えたが話す事にした。

「国立魔法大学付属第一高校は全国に九校のみ設置されている高校の一つで、魔法技能師通称魔法師の育成を目的に設立された国策高等学校で関東地方の東京都八王子市に第一高校、近畿地方の旧兵庫県西宮市に第二高校、北陸地方の旧石川県金沢市に第三高校、東海地方の旧静岡県浜松市に第四高校、東北地方の旧宮城県仙台市に第五高校、山陰地方の旧島根県出雲市に第六高校、四国地方の旧高知県高知市に第七高校、北海道地方の北海道小樽市に第八高校、九州地方の旧熊本県熊本市に第九校があり毎年一度全国魔法科高校親善競技大会通称九校戦が行われ魔法科高校の生徒がスポーツ系魔法競技で競い合う全国大会でまた全国高校生魔法学論文コンペティション通称論文コンペ。日本魔法協会主催で行われ魔法学や魔法工学の研究成果を大学、企業、研究機関など

に向けて発表するのが魔法科高校です。」

達也の説明が終わる千冬と真耶は唾然とした全然知らないのだ。

「すまんがやはりその様な高校は知らない」

と千冬が言い

「そうですか、失礼ですがIS学園とは一体どんな学校何ですか」

「IS学園を知らないのか」

「はい」

「ISはしているだろ、その専門の学校だ」

「いえ、ISと言う単語すら聞いた事ありませんが」

「何!?!」

互いに食い違う説明

「失礼ですがISを一度見せてもらえませんか」

「・・・まあいいだろう」

千冬は取り敢えず達也をISの格納庫に連れて行く

「これがISですか。」

「そうだ」

「それに触れてみてくれないか」

千冬は達也にISに触るよう指示する

言われたとおり触ってみる。すると

「ええ。起動した」

「男でISを動かした!!!」

「これがISか」

千冬と真耶は驚いた男でISを動かしたのは千冬の弟一夏しかいなかったからだ。達也が感心していると

「IS学園に入学してもらおう」

「いえ、自分は・・・」

「そういえばお前の持ち物を預かっていたな」

と渡さされたのは シルバーホーンだった

「この拳銃みたいなのは何だ」

「それは、CADです」

「CAD?」

「CADは術式補助演算機の略です魔法師のアイテムみたいなものです」

この時達也は確信した。

「どうやら自分は自分の知る世界と違う世界によろです」

「どうゆう事だ」

「実は自分は、気絶する前に謎の穴に吸い込まれたです」

「それに自分はI S学園もI Sすら知らない。そして貴方達二人共魔法科高校もC A Dも知らない。自分の世界ではI Sが存在せず魔法が存在し、この世界は魔法が存在せずI Sが存在するこれが動かぬ証拠です」

そして二人共信じざる得なかった。

第3話

「しかし魔法か架空の物だと思っていたがお前の世界ではあるのだな」

「はい」

「ねえ、司波くんあなたの世界の事もっと詳しく教えてくれるかな」

と山田先生は尋ねてきた

「分かりました」

達也は承諾し全てを話したが二人には驚く内容だった。20年近く続いた第三次世界大戦、十師族、魔法とCAD、戦略級魔法師、そして達也が戦略級魔法師で日本国防軍第101旅団独立魔装大隊の特務大尉で十師族の中でも力のある「四葉家」の者で2095年の世界から来たと言明された。

「第三次世界大戦!!?」

「戦略級魔法師!」

「お分かりいただけただけでしょうか。」

驚嘆している二人

「あ、でも司波くんて元の世界に戻る方法あるのかな」

「確かにな、謎の穴から来たと言ったがこの様な物は、なかったしこの世界で行く当てもないだろう」

「ええ」

「だったらIS学園で帰る方法が見つかるまで生活したらどうだ。」

「いいんですか!?!」

「ああ、お前はISを動かせる貴重な男だからな。お前はIS学園の生徒として、2週間後から通つてもらおう」

「後ほど、IS学園の制服と参考書にこの世界の事について書かれている本を渡そう」

「ありがとうございます」と達也が言うと

プルルルルと千冬の携帯の着信音が鳴る

見てみると着信者が

「篠ノ之束」

「何の用だ」

「話は聞かせて貰ったよ。それよりちーちゃんそいつに変わってくれない」

「どうしたお前が他人に興味を抱くなんて、珍しいじゃないか」

「さっきの会話を聞いて、魔法が気になったんだよ。だからさーそいつと変わって

くれない」

「わかったわかった。司波、お前にだ」

「自分に？誰からです」

「まあ、話せばわかる」

千冬は、達也に携帯を渡す

そこから暫くして

「分かりました」と電話を切る。

「どうした」

「いえ、どうやら篠ノ之博士は俺に専用機を作ってくれるそうでその際に自分の魔法とCADのデータを取らせてほしい、と」

と」

「は!?!」

と驚く二人

それから翌日、俺のもとに篠ノ之博士がやって来て約束通りに自分の魔法とCADを見せる。この時俺が使えないはずの深雪達の魔法まで使えたのだ。おそらくあの穴に吸い込まれた事で何らかの理由で俺が使えない深雪達の魔法まで使えたのだろう。

束はと言うと予想以上の魔法のデータやCADの仕組みを得られ満足だった。この

日から達也は篠ノ之束に気に入られた。

「やあ、たつくんの魔法やCADのデータが得られたおかげ束さん大満足だよー。これでたつくんの専用機に束さんお手製のCADを装備して魔法が使えるようにしておくよ」

「ありがとうございます。(しかしあだ名をつけられるとは、今までなかったな)」
「じゃあ束さんは早速返って専用機とCADの製作に取り掛かるねじゃあねたつくん」

と束は巨大な人参に乗って帰った。

第4話

束のデータ収集から数日後、達也は図書室で千冬から渡されたI Sの参考書とこの世界に関する本を読んでいた。

「成る程」

入学まであとちよつとなので達也は参考書を読んで予習復習をしている。陰から達也の様子を見ていた千冬と真耶は参考書を読む達也を見る。

「司波くん凄い集中力ですね」

「ああ」

と言おうと千冬が達也の所に行き

「司波今日は、買い物に行くぞ」

「買い物ですか？」

「そうだ、こつちの世界に来て生活必需品がないし、それに服も何時迄もその制服ではいられないだろ」

「確かに、分かりました」

確かに達也には着替えが無いし何時迄も第一高校の制服でいられない

生活をして行く上で必要な物が無い。

「では行くぞ」

図書室の本を片付けが終わり達也は千冬の元に行くI S学園の外に出るのは今日が初めてだった。

「分かっていると思うが外では自衛以外で魔法を使うなよ」

「分かっています」

どうやらI S学園から街まで行くにはモノレールで行くしか無いみたいだ。そして約10分くらい乗り目的の駅に着いたらしい

「まずは、洋服からだ」

そう言つて達也と千冬は洋服屋にやつて来た。しかし店の中は殆どが女物の服で男物の服は片隅に置いてある。

「ここまで女尊男卑が酷いとは、俺の通う高校にも成績優秀者を」花冠、そうでない者を」雑草・・・花と雑草に分けて呼ぶ隠された悪習が残っています。」

「いわば押し付けられた負債のようなものです。過去に囚われ、今を見ようとしなない、そんな考え方は愚かでしかない。」

「すまん、不快な思いをしたか」

「いえ、お気になさらず」

「しかし 中々良いことを言うな。だが花の方が雑草より上と言うのはどうにも分からん」

「どういうことですか？」

「いや何、鉢植えで大事に育てられた花とその辺に生えてる雑草。どう考えても雑草の方が強い筈だ。抜いても抜いてもすぐに生えてくるといいうじゃないか」

「・・・なるほど。そういう考え方もできますね。」

「織斑先生のような考え方を持った生徒が第一高校にもいれば、少しは変わっていたかもしれない。」

と遣り取りをしながら買い物をする。

そして達也は服を10着と替えの下着選んで購入する。

次に靴屋でシューズを買い次に生活用品などを買う。

「そろそろ昼だな何処か適当な場所で食事をするか」

「そうですね」

「その前に先の買い物で少し使いすぎてしまてな銀行で少しおろさせてくれ」

「分かりました」

買い物で使いすぎてしまい銀行でお金を下すことにした。

近くの銀行に行き受付番号を待っていると

「動くな！全員その場から動くな」

突如銀行に強盗が現れた。

犯人は6人組の男女でリーダー的な女がISを身に纏い5人の男は銃を持っていた。

「いいか 動いたら・・・」

バアンと発砲音が響く

「この中に金を詰めろ」

「全員中央に集まれ」

人質たちは中央に集まるが達也は動こうとしない

「おい、お前中央に集まれてのが聞こえなかったのか」

（強盗犯は6人で内一人はIS操縦者か）

犯人は達也に銃を向けたが達也は微動だにせず

「この」バアンと犯人の一人が達也に銃を発砲した

そこに居る全員が達也が死んだと誰もが思ったが

達也は手をかざして分解魔法で銃弾を消す。

「何だ？どうなってるんだ」

全員何が起こったかわからなかった。

バアンバアンバアンと犯人の一人が続げざまに発砲したが達也は分解魔法で次々と

銃弾を掻き消す。

「この化け物め」

犯人一人がナイフで達也に襲い掛かってくるが達也即座に得意の九重八雲の体術で犯人の腕を掴み投げ飛ばす。すると、

「そこまでよ。大人しくしなさい」

ISを纏った主犯格の女が達也にブレードを向けるが達也は従わず

女は達也にブレードをふりかざす。

今度こそ終わったと思ったISは世界最強でありISを倒せるのはISだけだと皆信じていたからだ。達也は即座にシルバーホーンをISに向ける

そして、分解魔法「雲散霧消」を発動する。

「雲散霧消」発動」

するとISが霧の様に消えていたのだ。

「どうなて居るのISが何で消えるの!」

全員が驚いたISが消えてしまったのだ。

そして残りの強盗犯の銃も消す。

「織斑先生後はお任せします」

「あー 良いのかこれでは、言い訳が立たんぞ」

「こうなってしまうっては仕方ありません」

「そうか」

千冬は追撃する様な形で犯人に向かう

残った犯人は千冬に倒された。

達也が魔法を使つてしまった後のことが大変だった。

外には、多くの警察と報道陣が居たのである。

もう避ける事は出来ない。

「こうなてしまった以上は仕方ありません」

「まああの場合は致し方ないこの事は、私に任せろ」

「え、ええ」

千冬は外の警察と報道陣の方へ行く

「おい、出て来たぞ」「おい、カメラ回せ」

皆さん落ち着いて下さい。ここに押し寄せた強盗犯は鎮圧されました。」

それを聞いて警察と機動隊が銀行に突入する

しかし、報道陣は千冬に質問を浴びせ始める。

「一体誰が鎮圧させたのか」

「私ともう一人の男です」

「それでは、そのもう一人の男は今何処にいるんです」

そう言うのと織斑先生が俺を見て手招きをする

こつちに来いと云つてる様でやれやれと思ひ。俺は織斑先生の方に歩いて行き、報道陣の質問の波が押し寄せた。

「その人と貴方が犯人グループを鎮圧させたんですか」

「そうです。そして勝手ながら、この方が都合がいいので此処で言っておきます」

千冬は大きく深呼吸をして言い放った。

「彼は、2人目の男性 I S 操縦者です」

たったその一言。しかしその一言が重要性がどれ程の世界の人たちに衝撃を与えるか。

「そ、それは本当ですか!!?」

「彼は学生の様ですが何処の学校の生徒何ですか?」

「I S 学園はこの事をしてるんですか!?!」

(やはりこうなつたてしまたか)

達也は予想はしていたがまさかここまで驚かれるとはと困惑した。

「詳しい事は、後ほどの会見の場で説明します。これから警察の事情聴取がありますので、これで失礼」

千冬は警察方に行き達也もそれに着いて行く

そして後日会見で記者達から

「銀行で強盗犯の一人が彼に銃を発砲しましたが銃弾が消えたと店内の人質や犯人が証言したんですが」や「主犯格の I S 操縦者が彼に襲い掛かって来た時彼が拳銃の様な物を向けたと同時に I S が霧の様に消えた」と証言したんですが」と言う質問に千冬は、「この司波達也君は魔法師で魔法が使えるんです。自衛のために魔法を使ってしまったんです。実際に目にもしてもらった方が早いでしょう」そう千冬が言い達也の方を見る。

達也は飛行魔法、分解魔法、再成魔法、障壁魔法、閃光魔法などを見せ記者達を驚かせた。

そして分解魔法「雲散霧消」で I S や銃弾を消した事やサイオンの事や拳銃の様な物はシルバーホーンと言う C A D (術式補助演算機) の事やこれを自分が作ったとそして最後に戦略級魔法と言う一度発動すると五万人クラスの大都市や一艦隊をも壊滅させる魔法が使える事を話す。この事は全世界に配信され人々を驚嘆させた。世界中の新聞やテレビは達也の一面を飾った。

「I S 最強説崩れる」「I S が魔法に敗れる」「二人目の男性 I S 操縦者は魔法使い」「魔法が実在した」などこうして達也は世界中の I S 委員会のメンバーなどに目を付けられ同時に世界各国の企業や研究者らは達也の魔法と C A D の技術を欲した。またある者

はあわよくば達也を自分達の国家や組織に取り入れようと考えていた。

第5話

そして今現在

俺はIS学園の制服着て1年1組の教室にいる。周りを見渡せば女子ばかりそして織斑先生の弟の織斑一夏が俺の隣の席に座って俺の方を見てくる。まあここは元々女学校男の俺には場違いだからな。

「えー、新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私は、今日から一年間を共にする副担任の山田真耶です。分からないことがあったらなんでも聞いて下さいね」

山田先生は自己紹介を終え本題に入る

「それでは、今から皆さんに自己紹介をしてもらいます。それでは、出席番号順にお願いします。」

山田先生の呼び掛けにより自己紹介が始まった。

「私は、相川清香です。趣味はスポーツ観戦とジョギングです。あと彼氏はいませんよろしくお願いします。」

(名前と趣味はいいとして後半の部分はと言う意味だ?)

そして順調に進んで行き一夏の番が回って来た。

一夏は教壇の前に行き

「織斑一夏です。えーと……」

クラスの女子は続きを。

と言う視線を一夏に向ける。一夏はその視線に気づく

「以上です」ズッコ!

クラス全員一斉に姿勢を崩す。(達也を除く)

その直後織斑先生が入って来た。そして一夏の席まで行くと、

「バシン」と出席簿で一夏の頭を叩く。

(あの出席簿硬化魔法の類が掛かっているのか?)

達也は出席簿に硬化魔法でも掛かっているのではと疑った。

そして織斑先生の説教が始まる。

「貴様は、ろくに自己紹介もできなかなか!」

「げ、千冬姉」

「バシン」

「学校では、織斑先生だ」

(あの出席簿本当に硬化魔法が掛かってないのか?)

その後千冬は山田先生に向き直り

「山田先生 遅れてすまなかった。」

「いえいえ、会議は終わられたんですね。」

「ああ、先程終わったところだ。いきなり初日からホームルームを任せてすまなかった。」

「いえ、これも副担任の仕事です。何でも頼って下さい。」

と二人の会話が終わり千冬が教壇の前で自己紹介をする。

「この度、君達の担任を受け持った織斑千冬だ。私の仕事は君達を1年で使い物にする事だ。これから一年間よろしく頼む。」

「「ッ!?!」」

と達也は周りを見て女子がおかしいと悟った。次の瞬間

「キヤア————!!!」

と女子たちの黄色い声が上がった。

（何だ？今のは、九校戦での一条の爆裂魔法と同等の威力なのか!?!）

そして気絶していた一夏も今ので目を覚ました。

「本物の千冬様だわっ!」

「私、千冬様に会う為九州から参りました!」

「私を罵ってー!!」

と様々な言葉が飛び交い千冬は頭を抱える。

「何故、毎年の様に私のクラスにはバカが集まるのだ。これは学園側の嫌がらせなのか」
ハアー

と溜息をつく

「それでは、自己紹介の続きをしてくれ。」

織斑先生の言葉で自己紹介が再開する。

順調に進んで達也の番が来て教壇の前に行く。

「司波達也です。新聞やテレビで知っている人もいるかも知れませんが世界で二人目の
IS操縦者です。男性ですが気兼ねなく話を掛けてもらえたら光栄です。これから一
年間よろしくお願いします。」

そして達也なりの笑みを浮かべてお辞儀をして席に着く

クラス一同達也の笑みや完璧な自己紹介に見惚れていた。

「ねえねえ、あの人が魔法使いの!」

「かなりイケメンじゃない!」

「カッコイイ」

あの銀行強盗事件で犯人グループを魔法で鎮圧した事で達也の名は一気に世間に知られる様になった。

その後順調に進んで自己紹介が終わった。

第6話

(彼奴が司波達也か．．)

俺、織斑一夏は司波達也がこの学園に入学して来たのを見て心の中で呟いていた。

世間では、司波達也は英雄的存在だ。ブリュンヒルデとし世界に名高い俺の姉である織斑千冬と共に強盗犯を退治し、さらに魔法で強盗犯のISを倒した。しかも、男には、乗れないISを動かした二人目の男性IS操縦者だ。

最初達也の事をした時はただただ嬉しかった。何せ二人目のIS操縦者つまり仲間が出来たからだ。

だが、達也が強盗犯の銃弾やISを魔法で倒した時の映像を見た時思った、俺も何処で達也の事を自分の中のヒーロー像と重ねていた。

だから俺は達也の事が少し気になる。だから、俺は達也の事をもっと知りたいんだ。今から話を掛けてみるんだ。

「よう、テレビで見たんだ。凄いな強盗犯やISを倒すなんて！俺は織斑一夏。一夏でいいぜ！よろしくな」

「司波達也だ。俺の事も達也と呼んでくれ、よろしく」

「男一人で参つてたんだ。達也が来てくれて本当によかつたぜ」

「確かに、男一人じゃ精神的に辛いかもな」

ザワザワザワ

達也と一夏は、周りの女子たちから凄まじい好奇の視線を浴びながらも話を続けていた。何と言つても、教室内だけじゃなく廊下で他のクラスの女子たちの視線も浴び更に辺りからヒソヒソと話し声が聞こえてくる。

（ねえねえ、織斑君と司波君どっちが好き）

（私は織斑君かな）

（私は断然司波君ね！）

（織×司キタコレ！）

と言つ具合に色々と聞こえ最後のは一体どう言う意味だ？

「この視線どうにかならないかなあ」

一夏はこの視線に参っている。

「仕方あるまい。俺たち男性はこの学園は場違いな場所だからな」

「それはそうだけど三年間耐えられるかな」

「まあ、キツイだろうが一週間もすれば慣れるさ。それまで耐えればいい話だ」

達也は一夏の悩みを軽く受け流す

その時一夏は疑問を感じた。

「達也で、何でそんな平気な顔しているんだ？」

「いや、俺もかなりキツイぞ（まあ、俺は感情が欠落しているからそう見えても無理ない）」

「またもや受け流す。」

そんな時一人の女生徒が近づいて来た。

「司波、ちよつと一夏を借りるぞ」

女生徒は一夏を指差して尋ねる

「ああ、構わない。それと俺の事は達也で構わない。（この人が篠ノ之博士の妹の篠ノ之箒さんか。確かに篠ノ之博士と何処か似ているな、どれ程の実力者なのか見てみたいな）」

「感謝する。一夏行くぞ。」

篠ノ之箒は、一夏を連れて教室を出た。

残った達也は

（読書でして待っているか。）

授業が始まるまで読書して待つことにした。

この間買った本を読み始めようとした時

「ちよつとよろしくて?」

達也は声のした方向に目を向ける。

声の主は如何にもお嬢様と言った女性だった。

「ああ、構わないが。(この女性は、確かイギリス代表候補生のセシリア・オルコットだったな)」

達也は軽く返事をする。

「あなたは、先程出ていた猿と違いかなりの腕利きの様ですわね。どうでしょう、この私とIS勝負してもらえないでしょうか」

セシリアは達也に勝負を申し出た。

達也の返答は

「イギリス代表候補生に決闘を申し込まれるとは光栄だがその申し出は断らせて貰う。」

「何ですって、理由をお聞きしてもよろしいでしょうか(私の申し出を断るですってえ)」

セシリアの表情が少し揺らぐ

(何か、気に触るような事でも言ったか?)

彼女が苛立った理由を考えながら理由を述べた。

「君は、俺を買い被り過ぎだ。俺は一介の高校生だ。それに、代表候補生と一介の高校生じゃ勝てる訳がない。これが理由だ」

達也は彼女に理由を述べセシリアに聞かせる。

当のセシリアの表情は冷めていた。

「ふん、所詮男は男なのです。私の飛んだ見当違いでしたわ。それでは失礼」

と、吐き捨てて自分の席に戻る。

丁度一夏が戻って来た。

「達也、どうかしたのか？」

一夏が尋ねる

「いや、ちよつとイギリス代表候補生に決闘を申し込まれたんだが断つただけだ。」

と達也はそう答える。

第7話

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り授業が始まる。

——と言うわけで、I Sの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したI S運用、例えば無許可でI Sを起動したりきた場合は、刑法によって厳しく罰せられ——

山田先生がブラックボードに投影されたモニターを指をさしながら、教科書を解説していく。授業内容の話に耳を傾けて聞く。

I Sの運用方法や使用目的等と言った初歩的な部分だが、流石に専門用語や知識と言っただけ聞き取れない言葉があったが入学前に読んでいたお陰で大体は理解できる。

I Sに携わって無い一般人にはなかなか難しいかもしれない。現に俺の隣に座っている一夏は顔が蒼白く挙動不審になっている姿が視野に入ってくる。おそらく理解出来てないんだらうだが聞き慣れないと言っても参考書や山田先生の解説で理解出来ないだらうか？ 山田先生の授業解説は良く分かりやすい筈だが？

「織斑君、司波君、何か分からないあったら聞いて下さいね」

「先生！」

「はい、何処が分からないですか？」

「全部わかりません」

「え！ぜ、全部ですか？」

山田先生は予想外の答えにオドオドと困った顔をする

「おい、織斑。参考書はどうした」

等の一夏は

「配布されませんでした」

そして織斑先生の出席簿アタックが一夏の頭に直撃

「貴様、最近何か捨てなかったか？」

「えっと？あ・・古い電話帳と間違えてゴミ収集に出しました。」

またしても出席簿が直撃する

「司波は、お前はどうかだ」

「いえ、問題ありません。大した量でもなかったので配布されてから三日で読み終えま
した。」

「あれを三日で全部!?!」

「ほう。では、~~×~~ページの25行目から読み上げてみる」

達也は25行目から読み上げる。35行目に差し掛かったところで

「もういい、一語一句相違ない素晴らしい回答だった。」

「織斑、後で再発行してやるから取りに來い。内容は一週間で覚えろ。いいな」

「流石に、そ「覚えろ！いいな？拒否は許さん！」はい」

織斑先生の圧力に屈した一夏

「さて、この馬鹿者が参考書を無くしたので授業が進まんな。代わりに近い内に行われるクラス対抗戦の代表者を決める。自薦他薦でも構わない。」

織斑先生は授業が進まない事を見て、

春先で行われるクラス対抗戦の代表者を決めようと言うのだ

「私は、織斑君を推薦します。」

「私も織斑君がいいです」

「私は司波君がいいと思います」

「私も司波君がいいです。」

など、クラスの女子は一夏と達也を推薦し始めた。

無論二人の意思は無視

「ふむ、他に意見は無いか？では、この二人の中から決める」

「待つて下さい！」

机を勢いよく叩き声を荒げて立ち上がったのは、

イギリス代表候補生セシリア・オルコット

「その様な選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんて恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！」

女尊男卑の思考に染まっている彼女としては黙っている訳にもいかないのだろう。

「実力から行けば私がクラス代表に成るのは必然・・・それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！私はこの様な島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「いいですか!?!クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で――

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

彼女の罵声に一夏が口を挟む

「あつ、あつ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますの!?!」

予想に反し彼女の怒りは頂点に達した。

「はあ、やれやれ」

と達也は溜息を吐く

「セシリア」

「何ですの!？」

「お前が言っていた事は I S の産みの親の篠ノ之博士や世界最強の織斑先生を含めこのクラス全員を侮辱している事になるぞ。それに I S を産み出したのは日本人だからお前はその後進的な文化の I S に乗っているんじゃないのか。君は代表候補生なんだから国の代表としての立場を考えてから口にしたほうがいいぞ」

「それに、織斑先生は自薦でもいいと言った筈なら何故自分でやりたいと言わなかったんだ」

「うう」

正論を言われ顔を引きづるセシリア

「それから一夏」

「何だ？」

「セシリアが日本を侮辱したから一夏がイギリスを侮辱して良い理由にはならないぞ」

「け、けど」

「確かに、イギリスの料理は、不味いかもしれないけど。美味しいものもちやんとある例えば紅茶が美味しいし俺の母や叔母上も好んで飲んでいたぞ」

「……」

「よくも、私に恥をかかしてくれましたわね」

いや、自業自得だと思おうが

「決闘ですわ！」

「おう、四の五のはきっぱりする」

「ハアア」

「……」まで来たらやるしかないか

「わかった。その勝負受けて立つ」

「織斑先生」

「何だ？」

俺は織斑先生にある事を頼む

「この勝負での魔法の使用許可をお願いします。」

俺が魔法の使用許可を得ようと言うのだ。それを聞いて周りざざわめき出す。

「理由は、」

「ISと自分の魔法の組み合わせは世界初でしょう。ですから、万が一の際事態の対処の為に極めておいた方が良いと思います。」

「成る程、確かに一理あるな。（確かに司波の実力を見るいい機会だ。）」

「わかった。司波、お前の魔法の使用許可を出す。ただし強盗事件の様にISを消滅させるなよ」

「はい、ありがとうございます」

織斑先生の許可を貰って達也は頭を下げる。

「では、司波、織斑、オルコット一週間後、第三アリーナで選抜戦をやってもらおう。用意しておけ。」

キーンコーンカーンコーン

と丁度いいタイミングでチャイムがなる

「以上で、授業は終わりにする」

第8話

そして時は流れ午後授業が終わり

現在、放課後。

「あ、織斑君、司波君。まだ教室にいてくれて良かったです」

教室を出ようとしていた一夏と達也を山田先生が呼び止めた。

「何ですか？山田先生」

「えっと、寮の部屋割りがとりあえず決定したので、これを渡しに来ました。織斑君が1025号室、司波君が1026号室です。」

と山田先生は部屋番号の書かれた鍵を紙と鍵を手渡す。

「あれ？先生、俺の部屋は決まってるじゃないやなかつたんじゃないですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通う様に聞いてたんですけど」

「それは、織斑君事情が事情ですので、空きがあつたのでそこに入ってもらいます。政府からの特命という事もあって、寮に入ってもらおう事を最優先にしてみました。」

（まあ、確かに世界で初めての男性操縦者だから一夏の登下校中を狙って来る輩が居る筈だったら学園の寮に入れた方が安全という訳か）

と推測する達也まあ第一達也はこの世界で帰る場所が無いからIS学園しか拠り所がないのだ。

「はあ、成る程・それで部屋は分かりましたけど荷物に関しては一回家に帰らない準備出来ないし、今日はもう帰って良いですか？」

「あ、いえ、荷物なら——私が手配しておいた。有り難く思え」と段取りがいい千冬

「まあ、生活必需品だけが、着替えと携帯の充電器があれば十分だろう」

「あ、ありがとうございます」

本当に最低限度の荷物だけだ

「司波、入学前に済ませて置いたな」

「はい」

一方の達也は入学前に千冬と買い物をしたから揃っている。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は午後6時から7時、寮の一年生食堂で取ってください。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えつと、その織斑君と司波君は今の所使えません」

「えっ？何ですか？」とそう聞き返す一夏

「一夏、俺たちが大浴場を使ったら同年代の女子と一緒に入る事に成るんだぞ」

「お、織斑君！女子と一緒に入りたいんですか!!!ダメですよ！」

「い、いや入りたくないです!?!」

慌てて言い直す一夏

寮の廊下

「ここか」

「達也とは、隣部屋だな」

「ああ、宜しくな」

「おう、宜しく」

「それとルームメイトが女子だって事を忘れるな」

「わかつかてるて」

と一夏は自分の部屋に入っていた。

(さて、俺も入るか)

達也は入る前にノックをして部屋に入っていた。

(まるでホテルだな)

と寮にしては豪華な内装に少し驚く達也すると

ガン!!

という音がしたので部屋を出て見ると、部屋の扉から木刀が突き出ていた。

「つて、本気で殺す気か！今の交わさなかつたら死んでゐるぞ！」

そして慌てて部屋を出る一夏

「た、助けてくれ達也」

「ハァー」

と溜息を吐く達也

「一夏、お前一体何をしたんだ」

「そ、それが部屋に入ったら箒がいて・・・」

「箒？あ、篠ノ之さんか」

「そう、その箒がバスタオル一枚の格好で・・・」

「一夏、お前ちゃんとノックして入らなかつただろ」

「そういば」

「一夏 俺は言つた筈だぞルームメイトが女子だつて事を忘れるなて」

「す、すまない」

「じゃあ、早く篠ノ之さんに謝つて許してもらえ」

それだけ言つて部屋に戻ろうとする達也

「ち、ちよつと待てくれ頼む一緒に箒に謝つてくれ」

と一夏が一緒に謝ってくれとせがんできた。

「な、何故俺まで」

「頼む、俺一人じゃ心細いんだ」

色々考えた末

「はあ、仕方ないな」

「ありがとう達也」

達也は1025号室の扉の前にたちノックをした

コンコン

「誰だ？」

それは、怒りのこもった声だった。

「司波達也だ。一夏を連れて来た入っていいか？」

「わかった、入れ」

中に入ると道着姿に木刀を持った箒が居た。

一夏の背中を押して箒の前に行かせた。

「ほら、一夏謝れ」

「箒？えっと、そのごめん」

「・・・」

箒は無言のまま一夏を睨み続ける

「じゃあ、俺は戻るからな」

達也は自室に戻った。

第9話

翌日朝早く起きた達也は朝のトレーニングを始めていた。

初めにランニングをしその後体術の特訓をし、頃合いを見て部屋に戻って制服に着替える。そんな時部屋のドアからノックする音がする。

「達也、朝飯食べに行こうぜ」

と一夏が達也を朝食に誘いに来た。

達也はドアを開け

「ああ、わかった。」

と言い一夏と食堂に向かった。

食堂

食堂は朝食を摂りに来た生徒が大勢いた。

一夏はシンプルにご飯、味噌汁、鮭の塩焼きと言った和食を頼んだ。

達也はトーストとコーヒーと言った簡単なものを頼んだ。

「あ、織斑君、司波君あはよう」

「おはようおれむくたつたつ」

「おはよう織斑君、司波君」

「おう、おはよう」

「ああ、おはよう 布仏さんと谷本さんに夜竹さん（何か、またあだ名付けられたな。それにこの布仏本音さん何故か中条先輩と同じ小動物的なオーラが感じられる）」

そこで布仏と谷本と夜竹に会い挨拶する二人

「司波君私たちの名前覚えててくれたんだ」

「俺は、一度会った人の名前は覚えてるんだ」

「そうなんだ」

「あと、たつたつ 私の事は本音でいいよ」

「わかった」

と達也に名前を覚えてもらって嬉しく思う三人そんなやりとりを見ていた周辺の女子達は

「うらやまけしからん！」

「好機を逃した！」

「私の織斑君が〜」

「私の司波君を返せ〜」

「悔しい〜」

など様々な声が飛び交っていた。

「ねえねえ、 たつたつ」

「何だ、 布仏さん」

「今度たつたつの魔法見せてえ」

「あ、 本音ずるい私も」

「私も私も」

と二人が達也の魔法を見たがていった。

「別に構わないが君達が想像するような魔法ではないと思うがそれで良いなら」

「わいわい」

喜ぶ本音その後朝食を摂った二人は教室に向かった。

そして休み時間

一夏と達也は女子達に囲まれ質問攻めに遭っていた。

「ねえねえ、 司波君て兄弟とかているの？」

「ああ 妹が一人」

「へえ！なんて名前なの」

「深雪で言うんだ」

「いい名前だね」

「ああ、ありがとう」

「はいはい！次の質もーん！千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!?やっぱ家でもクールに過ごしているの!？」

「い、いや。意外にだらしないかな・・・」

ゴツス！

「もう休み時間は終わりだぞ。下らない話をしてないでとつとと座れ」

「いつてええー」

タブーを言いそうになった一夏は、教室に入ってきた千冬に出席簿でど突かれた。それまで一夏と達也に群がっていた女子は席に戻って行く。

「織斑、お前に一つ知らせがある。お前の使用するI Sなんだが、学園で使える予備機が無いための準備に時間かかる。」

「痛つつ・・・準備？専用機？なんのことだ千冬姉」

ゴツス！

「織斑先生と呼べと何度言えば・・・お前には学園から専用機が用意される事になってい。だからそれが来るまで待て」

「せ、専用機!?まだ一年生なのに!？」

「つまり政府から支援されてるってこと!？」

「いいなあー、私も専用機欲しいなあ」

女子達が騒ぎ出すが当の本人は何のことかさっぱりだ。

「えっと、・・・どう言うことだ?」

「教科書の6ページを音読してみろ」

織斑先生に言われるがままに一夏は教科書を開き音読する。

「え、えっと現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作る事に拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを用いて研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています。」

音読を終えた一夏はまださっぱりだ。

「一夏、つまりISは世界に467機しかなくて、その内の一つを、お前にやるて事だ。」

と達也は簡単に説明する。

「へえーそうなのか」

達也の説明に頷く一夏

「あれ？だったら何で達也に専用機が与えられないんだ？達也も俺と同じ境遇なのに？」

「ああ、俺の専用機は篠ノ之博士が作っているから必要ないんだ」

そう達也が言うと

「「「ええ!?!」」」

「ほ、本当ですよ!!」

「篠ノ之博士に作ってもらっているの!」

とクラス全員が驚いた。すると千冬が

「お前達も知っているだろうが司波は魔法師だ。だから従来のI Sじゃ魔法は使えないだからアイツが作ってくれるそうだ。」

と言われクラス一同それを聞いて納得する。

ざわざわと教室がざわめくそして、その内の一人が恐る恐る織斑先生に質問をぶつける。

「あの先生。さつき思ってたんですけど、篠ノ之さんってあの篠ノ之博士の関係者なんですか?」

「ん? そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

(そんな、簡単に個人情報を言って大丈夫なのか?)

と達也は内心思う

「え、ええええー!?すごい!」

「篠ノ之さん!博士ってどんな人?時々見るあの格好は趣味なの!」

「篠ノ之さん自身も天才だったりするの!?今度ISの操縦教えて!」

そしてそれを聞いてまた騒ぎ出す女子達は一同篠ノ之箒を見るが

バン!と机を叩いて立ち上がり

「あの人は関係無い!」

「!?!」

突然大声を出す篠ノ之箒だがすぐに我に返って

「大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるような事は何も無い」

篠ノ之箒は席に着いた。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令を」

「は、はい」

山田先生も困惑したが織斑先生の言葉にすぐに我に返って授業を始めた。

第10話

昼休み

授業が終わり昼食の時間がやって来た。

机の上の教科書を片していたら

「ちよつとあなた、どう言う事ですよ!?!あなた如きが専用機なんて!しかも篠ノ之博士
お手製の!」

とセシリア・オルコットがわざわざ達也の前まで来てそう言う。

「さつき織斑先生が言った筈だ。今までのISじゃ俺の魔法は使えないだから産みの親
である篠ノ之博士に作ってもらおうと。」

「そんなの納得出来ませんわ。あなたは魔法が無いと何もできないですよ!?!」

「まあまあ、落ち着こう」

と一夏が止めに入る。

「でも、まあ安心しましたわ。まさか訓練機で対決しようなんて思っていなかったで
しょうけど、一応勝負は見えていますけど!流石にフェアではありませんものね」

と言いながら去って行く。

「達也、昼飯食いに行こうぜ」

「ああ」

「箒も一緒に来ないか？」

「いや、私は・・・」

「俺は、一向に構わないが」

「なら、行こうぜ。みんなで食った方が美味いからな」

そう言いながら一夏は箒の手を取って食堂に行き達也も後を追う。

—— 食堂 ——

達也と一夏と箒の三人は、食堂に来て食券を買おうとしていた。

「何にしようかな。達也はどうする。」

「なら、おれは魚系の定食にする」

「じゃあ俺も達也と同じのにしよう」

「一夏私は、席を取っておくから私の分も持って来てくれ」

そう言つて篠ノ之箒は席を取りに行つたその後昼食を受け取つて一夏と一緒に篠ノ之箒が取つた先に向かう。

「場所取りありますがどうぞいます。篠ノ之さん」

そう言いながら席に座る。

「その篠ノ之さんと言うのはやめてくれないか出来れば下の名前で呼んで欲しい私もお前の事を達也と呼ぶ。それに敬語も要らん」

「わかった」

「そう言い昼飯を取る。」

「なあ、達也はなんか作戦とかであるのか？いくら魔法が使えても相手は代表候補生だぜ。」

「いや、まだ何も策はない」

「なあ、箒」

「何だ」

「俺にISの事、教えてくれないか？箒は俺よりISに詳しいだろうし」

「断る」

「うえっ！どうしてだよ箒」

箒に頼る一夏であったがあっさり断られた。

「お前があんなやすい挑発に乗るのが悪いんだ」

すると、一人の女子生徒が近づいて来た。

つけているリボンの色からして3年生だった。

「あなた達が噂の子ね？」

「はい?」

「はあ?」

「あなたが代表候補生と試合をするって聞いたんだけど、本当なの?」

「はい、そうですけど」

「でもあなた達素人よね? ISの稼働時間はどれくらい?」

「ええつと、2〜30分位じゃないですかね?」

「60分です」

達也は訓練機で歩く、飛ぶ、着地などをしたが元の世界でムンバルンスーツで動いていた時の感覚と一緒にだったので容易だった。

「2、30分や60分じゃ足りないわよ。ISの稼働時間が重要な。代表候補生は少なくとも300時間は動かしているわよ」

「そこで何だけどき、ISについて私が教えてあげよつか?二人纏めて面倒みてあげると」

「えっほんと「結構です。私が教える事になっていきますので」って筈」

一夏がその誘いを受けようとした時筈が割り込んで来た。

「あら?あなた達1年生でしょ?私の方があなた達より教えられるわよ?それにそつちの子は教わる気でしょ」

「私は……篠ノ之束の妹ですから」

「え!?!」

「ですので、結構です」

「そ、そう。それなら仕方がないわね!」

(妹と言う事に何か関係があるのか?)

達也は箒が篠ノ之博士の妹だからと言う理由でISに詳しいと言う事に疑問を感じた。

「えつと……教えてくれるのか?」

「今日の放課後、剣道場でだ。どれくらいの腕か見せてみる。」

「わかった、達也は、」

「俺は放課後調べ物があるから遠慮しておく」

「そうか」

——放課後——

整備室

「第一高校もそうだが流石国家機関と言ったところか。設備が充実しているな。」

達也はIS学園の整った設備に関心する。

席に座った達也

「一度 I S のデーターを見ておく必要があるな」

そう言いながらキーボードを叩く達也だったが突然口を開いた

「そこに居るのはわかって居る出て来たらどうだ。」

「!?」ピクツ

物陰から眼鏡を掛け頭にヘッドギアのような物をつけ青みがかった髪の毛の少女が出て来た。

「い、いつから気づいてたの?」

「入室した時からだ。それで何か用か。」

「わ、私は自分の機体を調整しに来ただけだから」

「そうか。名乗るのが遅れたが俺は司波達也だ。」

「更識簪です。・・・よろしく」

「用事が済んだ。俺は自分の作業に戻るから」

ある程度の会話をした達也は再びキーボードを打ち込む。

(あの人テレビで出てた魔法使い司波達也)

———— 数時間後 ————

(さて、ある程度の I S の情報は、わかった。そろそろ部屋に戻るか)

達也は使っていた器具などを元の場所に戻して帰るところだった。

「そこに、居る奴居るのはわかって居る用が有るなら隠れてないで出て来い。」

「!?」ピクッ

「まさか気づかれるとわねえ」

物陰から姿を現した

(この声は、叔母上!!!・・・いや声似ているだけで別人か)

「それで俺に一体何の用が。」

「あなたに興味があつてね I S を倒した魔法師さんを一目見てみたかったの。私は、この学園の生徒会長の更識楯無よ。よろしくね。」

(成る程。先の女生徒の姉妹辺りだろう。リボンの色からして上級生かしかも他の生徒とは雰囲気まるで違うしかも何故か七草会長と同じ分類の気がする。一応警戒しておく必要があるな)

「用が無ければ帰らせてもらいますがよろしいでしょうか」

「そんなに警戒しなくてもいいのよ。今のところあなたに危害を加える気は無いから。でもね万が一簪ちゃんに危害を加えたらお姉さん容赦しないから。」

突然放たれる楯無の殺気しかし幾多の修羅場を嗅ぐて来た達也にはその程度の殺気に微動だにしないそして自分と同じく妹に甘いと言う共通点を見つけた。

「私の殺気に平然として居られるなんて・・・益々興味が湧いて来るわね。今日のところは

これくらいにしとくわ。じゃあね司波達也くん」

とウインクをして去って行く

(セシリア・オルコットの事もそうだがあの更識楯無と言う人も調べておくか。)

——1026号室——

部屋に戻った達也は早速選抜戦の作戦を立てる事にした。

「さて、選抜戦の作戦を立てるか。あとあの更識楯無の事もおそらくなかなかの手練れだろう」

そしてある程度セシリアの戦闘スタイルと攻撃パターンを調べ上げた

そして更識楯無の事も

「更識楯無家が暗部の家系で学園最強か。成る程道理で他の生徒と違う訳か」

なんかここも十師族の七草家の長女で第一高校の生徒会長である七草真由美と重なってしまうと思う達也だった。

第11話

選抜戦当日

西側ピットに達也、織斑千冬が居た。

達也はもうすぐ来るであろう束お手製の専用機を待っていた。

「遅いな、何をやっとするんだあいつは、」

織斑先生は少し苛ついていた。

するとそこへ

「やあやあ、お待ちせ持って来たよ。」

「遅いぞ、束」

「まあまあちーちゃんそんなに怒らないでよ。これがたつくんの専用機「トライデント」だよー」

と達也の専用機を持ってやって来た束だった。

そのISは全身黒一色のISだった。

「主な装備は、美濃刀一刀にシルバーホーン2丁にライフル一丁だよー」

「ありがとうございます。篠ノ之博士」

「いや、たつくんの魔法のデータのお陰で今までのより強化されたし、装備はたつくんが持つて居たCADをもとに束さんのお手製のCADを装備したからサイオンを流せば魔法が発動するよ」

「何から何までありがとうございます。」

「司波、織斑の専用機がまだ届いていない為、お前が先にオルコットとやる事になった。済まないが良いか？」

「分かりました。届いてないのであれば仕方ありません。」

「そうか、感謝する。では行ってこい」

「はい」

と言い達也は束が造ったISを展開させ、ハッチに出ていた。

「ワアアアアー!!」

会場は生徒達で溢れ歓声が上がっていた。

——観客席——

「あれが篠ノ之博士の造った司波君の専用機」

「すごい」

「いいなー私も欲しい」

——アリーナ——

そしてアリーナの中央に構えるセシリアがいる。

「逃げずに来た事は褒めて差し上げますわ。それでは、最後のチャンスを差し上げますわ、今ここで謝るのなら許して差し上げないこともなくってよ？」

セシリアは眼光な眼差しで達也を睨みつけるが達也は無反応だった。

「くう、いいですわ。泣いても許しません事よ」

「両者所定の位置について下さい。これより、1年1組セシリア・オルコット、司波達也のクラス代表選抜戦を始めます」

「ワアアアー!!」

歓声上がる。

「それでは、始めー!」

「ブー」

開始のブザーが鳴り試合開始だ

セシリアはブザーが鳴ると同時に、スラスターを噴かせ自分の得意の攻撃ポジションを取ると主力武器であるスターライトMK・IIを展開する。

「お別れですわ」

達也に照準を合わせトリガーを引く。

ビュンツ!

と達也に放たれ爆発した。

「呆気ない試合でしたこと。これだから極東の島国の男はイヤですよ。」

セシリアは勝ち誇っていたが煙が晴れると

「!?」

そこには無傷の達也が居たのだ

「な、なんですのあれは？シールドバリアー」

達也の前に薄黄色い壁があつたのだ。

達也はセシリアから放たれたレーザーが当たる前に障壁魔法を発動したのだ。

そして達也は即座にシルバーホーンを展開する。

障壁魔法を発動し何事もなかったかのようにシルバーホーンを展開した達也にセシ

リアは焦りだす。

「今度は、そうはいきません。次は必ず」

もう一度トリガーを引くが、またしても障壁魔法で塞がれてしまった。

(データ通りの射撃だな)

「なかなか強固なガードですわね。でもこれなら簡単には行きません事よ!!」

そしてセシリアは使うつもりはなかった、機体に搭載されている特殊武装の”ブルー

ティアーズ”を発動させる。

「踊りなさい！私の奏でる輪舞曲で！」

ビットは四方に散らばっていき

一斉射撃を開始する。

しかし達也は難なく回避していき 今度達也の番だ。

達也はセシリアとの距離を詰めシルバーホーンをセシリアに向ける

「ドライブリザード」

達也はドライブリザードを発動させる。

「くう」

達也の放ったドライブリザードはセシリアに命中した。

「何のこれしき」

セシリアは達也の攻撃に耐えるが再び達也がシルバーホーンを向けて来た。

「そうは行きません」

とセシリアは加速して回避しようとする。

「逃がさん」

と達也はサイオン・ブリットを放った。

セシリアは回避しようとするも追跡能力のあるサイオン・ブリットからは逃げられなかった。

「どうやら私はとんでもない相手と闘っているようですわ。貴方への評価を改めなくてはならないようですわね。」

セシリアは自覚したようだ自分が相手にしている達也は強いと。

「そろそろ終わりにさせてもらおうぞ」

そう言う達也は加速する。

「イツ、インターセプト!!」

セシリア接近攻撃用の武器を展開しようとするも達也は既にそこには居らず、ハイパーセンサーでも感知が出来なかった。

「こっちだー!」

達也はセシリアの後ろに回り込んでいた。

そして達也はトリガーを引く。

「エアー・ブリット」

今度は空気濃縮弾（エアー・ブリット）を発動する。

エアー・ブリットがセシリアに命中しセシリアは少し後退すると達也は加速して蹴りを食らわす。

「はあー!」

「ぎゃあー」

達也の蹴りを食らって勢いよく後退する。

「まだですわ!」

セシリアは再びスターライトMK. IIを展開する。

達也に照準を合わせトリガーを引くそして銃身を少しズラしトリガーを引く。一発目は誘導つまり囿で二発目が本命である。

「これもデータ通りだな」

達也はあえてセシリアの戦術に乗り一発目の誘導に乗り

二発目を分解魔法で消滅させる。

セシリアの精神は既に限界に来ていた。

全ての攻撃が読まれ達也の魔法で塞がれてしまったのだ。

「ど……どうして……これが魔法の力と言うの……」

「魔法だけじゃない。それはお前の射撃に攻撃戦術が全てデータ通りだったからだ。データ通りの動きなら誰もが予想出来る。それが今回のお前の敗因だ」

「まさか、ここまで分析されているなんて……」

達也は動かないセシリアに狙いを定めトドメを刺す。

「フォンン・メーカー」

達也は振動系魔法フォンンメーカーを発動する。

超音波照射による熱線はセシリアを直撃する。

まともに食らったセシリアの機体はSEが尽きたようで機体は解除されセシリアは空中から落ちて行く。

達也は何も言わずに、落下していくセシリアを追い お姫様抱っこをする形でゆっくりと降下していく。

「優しいんですね。私は貴方の事を散々酷く言った筈なのに。／＼／＼」

「俺は、そこまでに酷い奴じゃないんだが」

そしてアナウンスが漸く我に返って

「し、試合終了！勝者 司波達也」

「これも想定内の範囲内だな」

「ワアアアー!!」

観客席では再び歓喜に包まれた。

「お前はまだ強く成れる。射撃時にいくつかアレンジを加えれば今よりもっと強く成れる筈だ」

達也は、セシリアに向けてそう言いハッチに戻って行く。

ドクンッ！

「何でしょう？この気持ちは？なにか胸が熱いような・・・こんな気持ち初めてですわ。」

——西側ハッチ——

「デビュー戦にしては中々だったな。魔法の方も中々だな」

「いえ、彼女の射撃がデータ通りの動きだっただけです。彼女がデータ通りに動かなかつたら苦戦しました。どうですか魔法の方はある程度見極められましたか」

「まあな、だがお前の魔法をまだまだこんな物ではないだろう。織斑との戦闘楽しみにしているぞ。それまで休んでおけ。」フツ

「はい」

千冬は言い終わると去って行った。

——更衣室——

「何でしょう・・・司波達也。彼の方を思い浮かべるだけで胸が熱くなりますわ。この気持ちとは一体？」

とセシリアの心に一輪の花が咲こうとしている事に誰も知る由も無い。

第12話

セシリアVS一夏の対決はセシリアの勝利に終わり

現在は 達也1勝0敗、セシリア1勝1敗、一夏0勝1敗の状態

—— 東側ハッチ ——

「いよいよ達也との勝負か」

一夏はやる気に満ちていたが同時に不安もあつた。

「厄介なのは達也の魔法だな」

「弱気になるな一夏」

「す、すまん」

弱気になつている一夏に喝を入れる筈

「準備は出来たな織斑？いつでも発射できる準備は出来ているから後はお前次第だ。くれぐれもヘマをするんじゃないぞ」

「おう、任せたつけてちf・・・じゃなかった分かりました織斑先生」

試合前に余計なダメージを食らう所だったと冷や汗をあく一夏

そして一夏は白式を展開し射出ポジションに着く。

「箒、行ってくるぜ」

「ああ。勝つてこいよ一夏」

と短い一言を言い加速する。

——アリーナ——

達也は既にスタンバイの状態で待機していた。

「達也、お互い本気でぶつかろうぜ」

気合い入れてる一夏の要望に応える達也

「わかった 一夏お前の要望に応えよう。」

「両者所定の位置について下さい。これより1年1組織斑一夏、司波達也クラス代表
選抜最終戦を始めます」

「ワアアアー!!」

と先のように歓喜が響く

「それでは、始め!」

「ブー」

ブザーが鳴り試合開始

先手は一夏だった。

雪片を上段に構え、達也に向かって突進して行く。達也との距離が狭まった所で雪片

を突き出す。

カキンッ

だが達也は、瞬時にトライデントに装備されている刀型CAD「美濃刀」を展開しそれを弾く。一撃目を防がれ一時後退する。が達也はそれを逃さない。

「圧斬り」

圧斬り加重系魔法で渡辺摩利の魔法だ。

この魔法は普通なら物体を真つ二つするのだが達也は手加減したのだ。

「くう何だ？」

まともに圧斬りを食らった一夏は何が何だかわからない様子

「考えている暇はないぞ」

達也は直ぐに美濃刀からシルバーホーンに変え、一夏に向けてトリガーを4回引く

「ドライブリザード」

と氷の塊が4つが一夏に直撃し、それと同時に加速をし一夏に蹴りを食らわす。

「くう」

達也の蹴りが強く一夏は地面に叩きつけられた。だが達也の攻撃は終わらない。シルバーホーンを一夏に向けて

「地雷源」

と一夏の立っている場所が爆発したのだ。

「ダアアア」

一夏の周りは爆煙とそれによって巻き上げられた砂煙が負うていた。

そして煙が晴れて来て一夏の姿が現れた。一夏は息を切らしていた。

「ハア ハア ハア つ、強い。だがまだぜ」

体制を立て直す一夏は再び達也に向かつて突進する。

突進してくる一夏に達也はシルバーホーンを向かつてトリガーを5回引く。

「エアア・ブリット」

空気濃縮弾を発射する

一夏は瞬時加速で何とか回避する。

「危なかったぜ。」

「いいのか。あれは切り札の瞬時加速だろ。今使ってしまったがまだ策はあるのか」

確かに燃費の悪い白式に瞬時加速を使ってしまったのだ。そして今白式のエネルギーの約40%も消費してしまったのだ。

——モニタールーム——

「凄まじいですね。司波君の魔法、一瞬で織斑君をあそこまで追い詰めるなんて」

「ああ、流石の私も少々恐れ入った」

「私もです」

モニタールームでは織斑先生と山田先生が試合と達也の魔法を分析していた。

「この勝負見えたな」

「そうですね。司波君の魔法がチート過ぎて、織斑君が可哀想に見えてきました。」

——観客席——

セシリアの視点

「なんて技量なのでしょう。彼の魔法もそうですけどあの判断力といい先の射撃能力の高さ。人間の急所をいとも容易く撃ち抜くなんて」

セシリアは達也の異常さ、そしてあまりの規格外すぎる魔法の威力に呆然とする。

簪&本音の視点

「す、凄いテレビで見た魔法以外にあんな魔法があるんだ」

「オオーあれがたつたつの魔法」

簪と本音は達也の多種多様の魔法に目を光らせていた。

楯無の視点

「テレビで彼の魔法を見たけどこれほどの威力とはね。やるわね。彼の事一度調べてみる必要があるわね」

（どうすればいい、達也の攻撃と瞬時加速で結構エネルギーを消費しちまった。）

エネルギーが始まって早々に40%も消費してしまつて焦る一夏

「どうした、来ないならこっちから行くぞ」

達也はシルバーホーンを一夏に向けトリガー5回を引く

「ドライブリザード」

達也はドライブリザードを発動する

一夏はなんとかギリギリで回避して行く。

「どうだ」

「やるな、だがこれはどうだ」

達也はシルバーホーンを翳し

「氷炎地獄（インフェルノ）」

氷炎地獄は振動系魔法で対象エリアに灼熱と極寒を同時に発生させる
ランクAの高難易度の魔法だ。

達也は高難易度の高い魔法「氷炎地獄」を発動させる。

大きな魔法式が現れそこから灼熱の炎と極寒の吹雪が一夏を包む。

「な、何だ？ ダアアア」

灼熱の熱さと極寒の寒さが一夏を襲う。

「ザワザワザワザワ」

観客席は騒がしくなった。皆達也の発動した氷炎地獄に圧倒されていたのだ。

暫くして氷炎地獄が消え一夏の白式のエネルギーは30%を切っていた

最早限界に来ている。

（まさかあんな大技を隠していたなんて、白式ももう限界だ。こうなったら単一能力（ワ
ンオブビリティ）を使えばもうSEが切れるなるかもしれないが、一か八かに賭けるし
かない）

「今度はこつちから行くぞ」

そう言い放つ一夏

「来い、一夏」

とシルバーホーンを構える達也

「いくぜ!!」

一夏は瞬時加速で達也に向かって行く

そして達也は突進してくる一夏を迎え撃つ。

達也はトリガーを4回引く。

「サイオン・ブリット」

サイオン・ブリットは一夏に向けて行く。

(うまくいってくれ!!)

一夏は全神経を研ぎ澄ましサイオン・ブリットが着弾するであろう位置を予測し、着弾点の手前で雪片式型を構え、一瞬だけ単一能力を使う。

「なにつ!! (サイオン・ブリットが消されただど)」

一瞬だったとは言え達也は一夏の接近を許してした。

「もらった!!」

「クッ!!」

達也は即座に美濃刀を展開し応戦するが白式の単一能力でどんどん押されていく。

(こうなれば)

達也は精霊の眼（エレメンタルサイト）を使い
単一能力の構造を把握して魔法を発動する。

それは「術式解体」 美濃刀を対象とし、接触型の「術式解体」を発動させる。
そして異変が起きた。

先までプラズマを帯びた雪片式型は強制的にキャンセルされ素のブレードに戻った
のだ。

「えー!??何が起きたんだよ?」

何が起こったのか戸惑う一夏だが達也はそれ程甘く無く達也はとどめを刺しにかかる。
「色々と驚かされたぞだがこれまでだ」

そして距離を詰めシルバーホーンのトリガーを引く。

「フォノン・メーザー」

達也はフォノンメーザーで一夏にとどめを刺す。

それを真向から受ける一夏。

「ダアア!」

そして白式のSEが0になった。

「試合終了。勝者司波達也」

「まあこんなところか」

「ワアアアー!!」

そして観客席から歓喜の声上がる。

結果 達也 2勝0敗、セシリア 1勝1敗、一夏 0勝2敗となった。

「あの攻撃には驚かされたぞ一夏」

そう言いながら尻もちついている一夏に手を差し伸べる

「けどよ、なんで俺の白式の単一能力が途中で発動しなくなっちゃったんだろうな」

「(黙つても仕方ないか) あれも俺の魔法の一つだ」

「そうか! それなら納得行くぜ! やっぱり達也はスゲエな」

一夏はその場で開き直り、納得する。

そして自分等のハッチに行く。

—— 西側ハッチ ——

ハッチに戻るとそこには織斑先生と山田先生が待つていた。

「見事な勝利だったぞ司波」

「おめでとうございます。司波君」

「ありがとうございます。それで何かご用ですか、織斑先生、山田先生、それに更識生徒会長」

達也は目を鋭くして、千冬、真耶、そして物陰に隠れている楯無に問う。特に更識楯

無は自身の叔母四葉真夜に声が似ている上、他の生徒と何処か違う雰囲気をもっている為、さらに鋭い眼光で睨みつける。

「あら、全力で気配を消していたんだけどそれに気付くなんて、私への愛の表現かしら？でも出会って2回目でいきなり愛の告白なんて。」

「キャ〜?? お姉さん恥ずかしい〜」

（やはりこの人七草会長と同じタイプの人間だな）

と睨め付けるも内心呆れる。

「まあ、そう更識に身構えるな司波。こちらの聞きたい事を聞けば帰してやる」

そして織斑先生は達也に問う。

「お前が試合で、使用したあの炎と吹雪の魔法は何だ。なぜ織斑の単一能力はキャンセルされたんだ？」

「（やはり聞かれてきたか仕方ない）あれは、「氷炎地獄」と言い振動系魔法の一つで対象エリアを二分し一方の振動、運動エネルギーを減速し、その余剰エネルギーをもう一方に逃がす魔法で隣接するエリアに灼熱と極寒を同時に発動させる魔法です。そして一夏の単一能力がキャンセルされたのは、俺の魔法の「術式解体」と言い無系統魔法の対抗魔法で圧縮されたサイオンの塊を「情報体次元」と言うアイデアを経由せずに対象物を爆発させ、そこに付け加えられた起動式や魔法式と言ったサイオン情報体を吹き飛ば

すです。あの時、俺が使ったのは接触型の「接触型術式解体」で「術式解体」とは違い魔法を防いでも爆散しないので連続で防げるんです。」

と達也は説明する。と三人は哑然とする

「要するに達也君の魔法は魔法を打ち消すだけじゃなく相手の能力を打ち消す事も出来るて訳ね。お姉さん益々驚かされちゃた」

「まあそんな所です。要件が済みましたなら自分はこれで失礼させていただきます。」

そう言いながら出口に向かう。

そして千冬は二人に顔を合わせ

「この事は外部に知られると面倒だ。只でさえあの強盗事件の事もある。司波のあの

「術式解体」と言う魔法については他言無用だ。山田先生、更識いいな?」

「分かりました」

「ええ」

第13話

—— 1年1組 ——

クラス代表戦が終わりみんな教室に戻っていた

「では 一年一組代表は司波達也くんに決定です」

「一繋がりでいい感じですね！」

と山田先生が言う。

「達也が代表か。やっぱりな二回戦とも無傷で圧倒的に完勝だったからな」

「そんな事無いさ。セシリアの射撃はデータ通りだったただそれだけだそうでなっかたら苦戦していたさ。それに一夏の単一能力も中々驚かされちゃたぞ」

「そ、そうか／＼」

と照れる一夏。

「話は終わりだ。馬鹿者」

と織斑先生が割って入る。

「クラス代表は司波達也」

「異存はないな？」

「「はーい」」

と織斑先生の問いに皆賛成だった。

——アリーナ——

「IではこれよりISの基本的な飛行操縦をしてもらおう」

「司波 織斑 オルコット 試しに飛んでみせろ」

「えっ!?!俺?!」

「早くしろ 熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

「I来い 白式」

「行くぞ トライデント」

「来なさい ブルー・ティアーズ」

と自分の専用機を展開する三人。

「よし 飛べ」

織斑先生の合図と共に三人は上昇する

「何をやっている? スペック上の出力では白式の方が上だぞ!」

「そんな勝って当たり前前みたいない言い方されても・・・」

（「自分の前方に角錐を展開させるイメージ」って言われても急上昇も急降下も昨日習ったばかりだぞ）

「一夏 イメージとは、所詮はイメージだ。ISは自分の手足を動かすのと一緒だ」
「そうですね。一夏さん。自分がやりやすい方法で模索する方が建設的ですよ？」

「そう言われてもなあ 大体大空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ」

「代表候補生のセシリアや空を飛ぶ魔法がある達也とは違うんだぜ」

「司波 織斑 オルコット 急降下と完全停止をやって見せる 目標は地上から10センチだ」

と新たな指示が来る。

「了解です では達也さんお先に」

「それじゃ一夏先に行くぞ」

とまず先にセシリアが行き、次に達也が行き成功する。

「うまいもんだなあ よし俺も行くか」

そして最後に一夏が行く

(背中 of 翼状の突起からロケットファイアーが噴出してるイメージを！)

(あれ!?!止まるのってどの位前から制御!?!)

止め方が分からない一夏は、そのまま地面に激突する。

ドゴンッ

「馬鹿者 誰が地上に激突しろと言った？」

「グラウンドに穴を開けてどうする 自分で責任もって元に戻せ」

と織斑先生に説教を食らう一夏。

「……すみません」

と謝る一夏に箒が

「情けないぞ一夏」

「昨日の……」アレ”か……」

「貴様 何か失礼なことを考えているだろう!?!大体だな一夏お前というやつは昔か

らー」

と一夏に説教たれる箒を無視して達也が手を差し伸べる。

「立ってるか?一夏」

「あ ああ……ありがとう達也」

と手を取る一夏

「ついでにこの穴を直すから」

「本当か!」

と達也はシルバーホーンを展開し地面に出来た穴に向け再成魔法を発動する。そ

して穴は直ぐに元通りになった。

「サンキュー達也」

「司波 余計な事はするな」

「すみません」

再成魔法で穴を直した事を織斑先生に叱られた。

放課後

食堂で祝杯が行われた。

「とうわけでっ！ 司波くんクラス代表決定おめでとう！」

「「おめでとうー!!」」

「いやあこれでクラス対抗戦も盛り上がるよねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー♪同じクラスになれて」

「司波くんがクラス代表なら私たちクラス無敵よね」

と煽り立てる女子達

「人気者だな達也」

「そんな事無いさ」

茶化す一夏に謙遜する達也

「パシャツ」

とカメラのシャッターの音がして達也達はカメラの方を向く

「はいはい 新聞部ですっ」

「話題の新入生織斑一夏さんと司波達也くんは特別インタビューにきましたー」

「あ 私は二年の黛薫子 よろしくねっ 新聞部部长やつてまーす はいこれ名刺」

と新聞部部长の黛薫子から渡された名刺を受け取る達也と一夏

「ではでは ずばり司波くん！クラス代表になった感想をどうぞっ！」

「クラス代表になったからには、クラス皆から託された想いに応えるためにクラス対抗戦では必ず優勝します。」

「はいはい ありがとうございます」

「ねえねえ 司波くんてどうして魔法が使えるの？」

「(そう来たか) 生まれつきとしか言えません」

「そうなの」

「はい」

そして達也のインタビューは順調に進んで途中、一夏へのインタビューになったが意気込みが遠く ちんぷんかんぷんな内容をコメントをする。

「写真撮るから」

「それじゃあ撮るよー 3・2・1」

この写真撮影で達也に近づこうとしたセシリアだったが、撮影の瞬間にクラス全員が集結した事に怒ったり、いつの間にか一夏の直ぐ隣で頬を紅く染めた筈が居たり、と色々あつたが無事幕を降ろした。

—— 1026号室 ——

「ふうー」

達也は部屋に帰って来て早速とベッドに横たわる。

「クラス對抗戦か、今の所の調べで分かっている専用機持ちは1組と4組だけか」

「1組は、俺と一夏とセシリアの3人で4組に1人か。確か名前は更識簪。あの整備

室に居た女性生徒で更識会長の妹。」

達也はクラス對抗戦の事を考えながら眠りに着く。

—— 翌日 ——

教室

「織斑くん、司波くん おはよー」

「ねえ 転校生の話聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「珍しいな」

と女性生徒が転校生の話を持ちかけて来た。

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「あら わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるわけではないだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

「でも、大丈夫 こっちには司波くんが居るんだから」

「そうだよ。司波くんには魔法があるから」

「司波くんっ クラス対抗戦頑張ってね！ 司波くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ。 司波くんが勝てばクラスみんなが学食のデザート半年間フリーパスだもんねー」

と達也に期待する女性生徒達みんなが学食のデザート目的である事に達也は表情に出さなかったが内心では「ガクッ」と少し呆れる。

「ーその情報古いよっ」

と突然クラスの入口から自信に満ちた声が聞こえて来る。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの そう簡単には優勝できないから」
声のする方を向くとそこには髪をツインテールにした少女が居た。

「鈴……?」

「お前鈴か?」

(どうやらこの鈴で女性生徒は一夏の知り合いみたいだな)

この鈴と一夏が知り合いだと推測する達也

そしてむーつとする筈

「そうよ 中国代表候補生 凰 鈴音 今日には宣戦布告に来ったわけ!」

第14話

その凰 鈴音は、入り口の前で胸を張ってポーズを決めている。

「何 格好付けてるんだ？ 全然似合わないぞ」

「んな・・!?なんてこと言うのよ!」

一夏の発言に取り乱す凰 鈴音だった が達也はその後ろに近づいてくる織斑先生に気づく。

「おい」

「何よっ!?!」

バシッ!

と凰 鈴音が織斑先生の出席簿で叩かれる。

「もうSHRの時間だつ 教室に戻れ」

「ち 千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ さっさと二組に戻れ そして入り口を塞ぐな邪魔だ」

「す すみません・・・」

と凰 鈴音は自分の教室に戻って行く

「あいつ、いつの間に代表候補生になってたんだ。初めて知った。」

「一夏の知り合いか？」

「・・・一夏、今のは誰だ？」

「一夏さんと親しいそうでしたけど」

バシッ！

「席に座れ馬鹿ものどもが」

「は、はい」

さっきの転校生の事で一夏に問い詰めた三人（達也は席に着いていたため除かれた）は織斑先生に頭を出席簿で叩かれ自分の席に戻る。

授業中

「篠ノ之　ここの答えは？」

「え！あ、はい」

「答えは？」

「き、聞いていませんでした」

バシッ!

「織斑 答えは？」

「えっ!？」

「答えは？」

「わ、分かりません」

バシッ!

「司波 答えは？」

「はい」

「この答えは、

です」

「正解だ よくやった」

「ここ、テストに出るからな」

箒と一夏は答えられず織斑先生の鉄槌を食らうが達也は正解し鉄槌を食らわなかった。

昼休み

「お前のせいだ！」

「なんでだよ……」

と箒が一夏に言う。

「まあ　話ならメシ食いながら聞くから……」

「む……ま　まあお前がそう言うのならいいだろう」

「達也も一緒に行こうぜ」

「あー」

「達也さんがご一緒なら、私もご一緒させてもらいますわ」

と言うことになり四人で食堂に向かう。

食堂

四人が食堂に着くと一人の女性生徒がこつち側に気づいた。

「待ってたわよ一夏！」

そこには、凰　鈴音が待っていた。

「まあとりあえずそこどいてくれ 食券出せないし普通に通行の邪魔だぞ」
「うっ うるさいわねわかつてるわよっ！」

そして俺たちは、空いている席に着く

「それにしても久しぶりだな ちょうど一年ぶりになるか元気にしてたか？」

「元気にしてたわよ アンタこそたまには怪我病気しなさいよっ」

「どういう希望だよそりゃ・・・それより鈴いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？」

「いつ代表候補生になったんだ？」

と鈴に質問攻めにする一夏

「質問ばっかしないでよ」

「アンタこそなにIS使ってるのよ？ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

と二人して仲良く話す姿を面白く思わない箒をよそに達也とセシリアは静かに昼食をとる。が痺れを切らした箒が割り込む。

「一夏 そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「まさか付き合ってるなんてことはないだろうな!？」

と一夏と鈴の関係を聞く箒

「べ べべ別にあたしは」

「付き合ってるわけじゃ・・・っ」

と取り乱す鈴に一夏が

「そうだぞ　なんでそんな話になるんだ」

「ただの幼なじみだよ」

（成る程　それであんなに親しいわけか）

と幼なじみと言う一夏に内心で納得する達也

そして一夏を睨む鈴

「何睨んでるんだ？」

（どうした　何を怒っているんだ！）

「なんでもないわよっ！」

と何を怒っているのか分からない一夏と達也

「幼なじみ・・・？」

「そうか　お前ら初対面なんだもんな」

（今更それを言うのか？）

「あーえつとだな　箒が引つ越していったのが小四の終わりだっただろ？」

「鈴が転校してきたのは小五の頭なんだよ　で

中二の終わりに国帰ったから会

うのは一年ちよつとぶりだな」

（そう言うことか つまり箒が最初幼なじみで 風 鈴音さんが2番目幼なじみと言った
具合か）

「で 鈴こっちは箒」

「ほら前に話したろ？」

「小学校からの幼なじみで俺の通ってた剣道道場の娘」

一夏に箒を紹介されてジーツと見つめる鈴

「ふうん そうなんだ」

そして鈴と箒が互いを睨み合う

「初めましてこれからよろしくね」 バチバチ

「ああ こちらこそ」 バチバチ

だが一夏は何が何だかわからないそう

「そ、それでこっちが 俺たちのクラスのクラス代表で二人目の男性IS操縦者の」

「司波達也だ よろしらしく 風さん」

「アンタのこともニュースで見たわよ。魔法を使うなんて凄いいじゃない あたしことは

鈴でいいわ あたしもアンタ事を達也て呼ぶから」

「ああ わかった」

やっぱり達也のことは世の知るところだった。

「ンンンッ！」

「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわー

中国代表候補生の凰 鈴音さん

？」

「・・・誰？」

「ちよっ!? わっ わたくしはイギリス代表候補生セシリア・オルコットですよ!? まさかご存じないの?」

「うん あたし他の国とか興味ないし」

「な な な・・・!?」

「言っておきますけどわたくし あなたのような方には負けませんわ!」

「そ でも戦ったらあたしが勝つよ」

「悪いけど強いもん」

「それに第1試合で達也に負けて第2試合で初心者の一夏に負けそうになったじゃない」

と挑発をする鈴

「言ってくれますわね・・・」

「・・・」

「一夏 アンタI Sの操縦まだまだなんですよ」

「お おう」

「ふーん」

「あ あのさあ I Sの操縦見てあげてもいいけど？」

と鈴がI Sの操縦の指導を誘ってきた。

「そりや助かー」

と一夏が言おうとした時テーブルから勢いよく箸が立ち上がった

「一夏に教えるのは私の役目だ！ 頼まれたのは私だっ！」

「そもそもお前は二組だろ!？」

と一夏に教えるの自分だと言い張る箸

「あたしは一夏に言ってんの 関係ない人は引っ込んでよ」

「関係ならあるぞ 私が一夏にどうしても頼まれているのだ！」

「後からじゃないけどね あたしの方が付き合いは長いんだし」

「それを言うなら私の方が早いぞ！」

（何故そこで張り合うんだ？）

「何度もうちで食事をしている間柄だ！ 付き合いはそれなりに深い」

と自慢する箸

「うちで食事？ それならあたしもそうだけど？」

なん……だと……!?

「いつ 一夏っ! どういうことだ!? 聞いてないぞ私は!」

「説明も何も……幼なじみでよく鈴の実家の中華料理屋に行つてた関係だ」

「な 何? 店なのか?」

「なるほど それで一夏は鈴の店に食べに行つてたて事か」

と納得する面々

「親父さん 元気にしてるか? まあ あの人こそ病氣と無縁だよな」

「あ……うん 元氣ーだと思ふ」

「それよりさつ 教室の放課後って時間ある?」

「あるよねっ? 久しぶりだしどこか行こうよ! ほら 駅前のファミレスとかさー」

「あいにくだが一夏は私とISの特訓をするのだ 放課後は埋まっている!」

「じゃあそれが終わつたら行くから空けといてねっ」

「じゃあね 一夏!」

そう言つて鈴は食堂を出ていった。

「さて、俺も行くか」

「達也さん わたくしも行きますわ」

「あ、ああ」

「一夏　当然特訓が優先だぞ!？」
そう言つて達也達も食堂を出て行く。

第15話

放課後アリーナ

一夏の特訓をする為に第三アリーナに来ていた。

メンバーは、達也、一夏、セシリア、そして訓練機を借りてきた箒で合わせて四人だ。今日は箒が一夏を指導するらしい。そして・

「達也さん よろしければわたくしとご一緒に特訓致しませんか／＼」 テレテレ

「え、ああ 構わないが（最近 セシリアが妙に俺に対して積極的だなあ）」

「はい／＼／＼」

と達也を誘うセシリア

その後一夏と箒は剣術の特訓をし、達也とセシリアは射撃の特訓をしている。それから暫く二組はそれぞれ自分達の特訓した。

「では 今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「ああ そうだなあ」

と達也とセシリアはこの辺で切り上げることにした 一方の一夏達も切り上げる様だった。双方共ピットに戻って行く 一夏と箒は達也達と反対のピットに戻って行く。

達也は着替えた後 自分の部屋に真つ直ぐ帰っていた。
そうしていると

ぱんっ

というが聞こえてきたのだ 何かかと思ひ部屋を出てみると鈴が一夏の部屋から出て行くのが見えたのだ。 達也は一夏の部屋に行き

「一夏 何があつたんだ 鈴が泣きながら飛び出していたが？」

「ああー 達也」

「何があつたんだ」

「それは 私が話す」

と箒は達也に一夏が何故鈴を怒らせたのかを話した。どうやら一夏は中学の時に鈴と約束をした時 ご飯を奢ってもらう約束だと勘違いしたらしい。

「ハアー 一夏 それはお前が悪いぞ」

「え？何で」

「一夏 物事はよく咀嚼してからするもんだぞ」

「??？」

と言ひ達也は自分の部屋に戻る 相変わらず一夏は何が何だかちんぷんかんぷんら

しい。達也もそれに劣らずの鈍感だが今の状況は流石に察する。

翌日

教室

今日クラス対抗戦の発表が行われたがその掲示板に書いていた事に皆驚いたのだ。何とクラス代表が達也ではなく一夏の名前が載っていたのだ。

「千冬姉 何で俺がクラス代表になってるんだ。うちのクラス代表は達也の筈」
バシッ

「織斑先生だ。司波の機体が少々整備不良でなだから代わりに織斑お前が代理で決まった」

「だったら 訓練機でー」

「馬鹿者 忘れたのか 司波の魔法は他のISでは使えん」

「そ そうだった」

「だからお前がやれ 異論は認めん」

（すまん 一夏。本当は整備不良じゃないだ あの後鈴が俺の部屋を訪ねてきて今回のクラス代表を一夏に変わってくれと頼まれたんだ。）

と内心で謝る達也。

その後一夏は鈴に勝負を申し込み負けた方が勝った方の言うことをいつなんでも聞

く約束をする。

そしてクラス対抗戦 当日 第二アリーナ第一試合織斑一夏VS凰 鈴音
アリーナの観客席は満員だった。中には試合を楽しみにしていた者もいれば 達也
の魔法が見れなれて残念がる者もいる。

「すげえ・・・人多いなあ」

「それだけ 一夏さんが注目されていることですわ」

「すまん 一夏俺の整備不良の為に前前に迷惑かけて」

「まあ 整備不良なら仕方ない」

「一夏 特訓の成果を見せてやれ!!」

と箒に言われた。

「ああ俺やるよ」

「その意気だ一夏」

「頑張れ 一夏」

「頑張ってくださいね! 一夏さん」

と三人に応援され一夏はアリーナに入っていくと、鈴が待っていた。

「それでは両者所定の位置について下さい」

とアナウンスが流れる。

「一夏」

「今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ?」

「雀の涙くらいだろ? そんなの必要ない」

「全力で来い」

「……一応言っておくけど I Sの絶対防御も完璧じゃないのよ シールドエネルギー

ギーを突破する攻撃力があれば 本体にダメージを貫通させられるんだから」

「死なない程度に殺すわよ」

「それでは両者 試合を開始してください」

とアナウンスで審判が試合開始の合図をしそれと同時に両者がぶつかり合う。

ガキインッ

と金属同士がぶつかり音がする。

「ふうん 初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「けどー甘いっ!」

「!?!」

鈴は衝撃砲を放つ

ド ンッ

「今のはジャブだからねっ」

ドオン!!

「ぐあっ!」

と衝撃が一夏に命中し後退する。

(いきなり76%!!?)

モニタールーム

「なんだあれは・・・?」

「おそらく衝撃砲だろう」

「流星は達也さん そのとうりですわ。空間自体に圧力をかけて砲身を生成 余剰

で生じる衝撃 それ自体を砲弾化して撃ち出す」

「ブルー・ティアーズと同じ 第三世代兵器ですわ」

アリーナ

「よくかわすじゃない 衝撃砲「龍咆」は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

(確かに砲身や砲弾が見えないのはきつい)

(俺の武器は「雪片式」だけ・・・)

(こんな時千冬姉はどうする)

回想シーン

「バリアー無効化攻撃?」

「雪片の特殊能力がそれだ」

「それで、クラス代表決定戦の時に達也が白式の単一能力を無効化した魔法みたいなやつか？」

「まあ そんな所だ」

「相手のバリアー残量に関係なくそれを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる そうするとどうなる？ 篠ノ之」

「は はい ISの「絶対防御」が発動して大幅にシールドエネルギーを削ぐことができます」

「序でに言っておが司波が前回使ったのは「障壁魔法」らしいだから雪片で切り裂こうともダメージはないらしい」

「え！ そうなのか」

「ああ」

「じゃあ 達也もう無敵じゃねえか！」

「まあ そうだな」

「でえ 話を戻すが私がかつて世界一の座につけたのも「雪片」のその特殊能力によるところが大きいだがこの能力は……」

現実

「鈴」

「何よ?」

俺は覚悟を決めた

「本気で行くからな」

「な 何よ・・・／＼／＼ そんなこと当たり前じゃない!」

「とっ とにかくっ 格の違いってのを見せてあげるわよ!」

「うおおおおおっ!」

と一夏が鈴に斬りかかろうとした

その時

ドオオオオン

と突然大きな衝撃が走り アリーナの中で煙が舞い上がる。

第16話

突然大きな衝撃が走ったアリーナ

そこに煙がもうもうと立ち込める。

そして徐々に煙が晴れていくとそこには黒い物体が姿を現した。

「な・・・何だ？ 何が起こつて・・・」

「一夏！ 試合は中止よ！ すぐにピットに戻つて!!」

「一夏 逃げてっ!」

「お前は どうするんだよ!?!」

「あたしが時間を稼ぐから早く!」

「あたしがつて・・・女を置いてそんなことできるか!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうがっ」

鈴が自分が囷になるから先に逃げろと言うも、一夏が反論し口論していると白式のハイパーセンサーがアラートを飛ばす。

『所属不明の I S と確認 ロックされています』

「あぶねえっ!!」

と不明機からの攻撃をかわす一夏と鈴そして不明機から距離を取って行く。

——観客席——

試合開始後しばらくして達也はモニタールームを出て観客席に行ったそこで偶然にも更識楯無と隣り合わせの席になったのだ。ただでさえこの人は警戒する人なのに偶然にもなってしまったのだ。

「な、何だ？」

「織斑先生 聞こえますか？」

『聞こえている 更識 お前今何処にいる？』

「観客席です 達也君も一緒に居ます」

『司波もいるのか なら都合が良い お前達は生徒達の避難をしろ、現在適断シールドがレベル4に設定され 全ての扉がロックされている こちらからは救助に向かう事も生徒達をアリーナの外へ避難させる事も出来ない』

「分かりました」

『それと司波』

「はい？」

『生徒の避難が完了したらお前はあの不明機の対処をしろ』

「了解」

「じゃあ 達也君準備をして」

「はい その前に一夏達にこの事を報告させてください」

「わかったわ なるべく早くね」

楯無は言つて 観客席の状況を見て作業に掛かった。

達也はなるべく早く終わらせる為に一夏達に通信を繋げる。

「一夏、鈴聞こえるか？」

『達也か』

『達也』

『達也 お前専用機が整備不良じゃなかったのか？』

「あれは嘘だ」

『嘘!』

「ああ、鈴がクラス対抗戦でお前と戦いからクラス代表を代わってくれと頼んで来たんだ」

『そうだったのか』

『そ、そうよ。てか、元はと言えばアンタが原因なんだから』

『何でだよ?』

「一夏 10分だ。10分間奴の足止めを頼むこっちの避難が完了したら俺もそっちに

行くそれまで持ち堪えくれ」

『分かった』

そう言つて通信を切り更識会長のところに向かう。

「達也君 一夏君達の報告終わったの」

「はい」

「じゃあ 早速みんなの避難を開始するわよ」

楯無は可憐な立ち振舞いで生徒達の避難をする。その姿は生徒会長に相応しく達也の世界の七草会長、十文字会頭、渡辺委員長と言つた第一高校の三巨頭と重なる見える。

しかし——

「ちよつとなんで扉が開かないのよ!？」

「開けてよ!ここから出してよ」

「なんで開かないのよ」

人だかり所で悲鳴が上がる。

「嫌!早く出してよ!」

「痛いわね!押さないでよ」

「貴女こそ押さないでよ」

「苦しいわね!」

益々生徒達は混乱し逃げ場を失った生徒達がパニック状態になった。
(マズイ事になったわね)

と内心で状況が最悪なのを悟るも良い打開策が見つからない。何かいい方法はないかと考えている時だった。一人の女子生徒が焦りながらこつちに向かつて走って来た。恐怖、不安、焦りで精神に異常をした視線が達也の方向に向いており、一目で正常でないわかる。女子生徒は達也の側まで来ると胸ぐらを掴んで

「ねえ、あなた、魔法使いなんですよ？なら何とかしてよ。どうかして魔法で扉を開けてよ!!」

大勢の生徒達に注意を向けていた楯無はその生徒の行動に気付くのが遅れてしまい。それが言葉が引き金になり

「そ、そうよ！男なんだから、私達女の為に働きなさいよ」

「魔法で早く扉を開けてよ」

「あなた専用機持ちでしょ」

「それに今戦っている男だつてどうせ直ぐにやられるわ！早く私達を助けなさいよ！」

一ヶ所が上がった感情の爆発は、あつという間に周囲の生徒に広がりそして『男』『魔法使えるんだから』『専用機持ち』と言う理由で、達也に詰め寄る生徒が数人見受けられる。女尊男卑の思考に染まった生徒達だろう。

混乱状態、とてもじゃないが手に負える状況ではなかった。

その時

「貴女達いい加減にしなさい!!」

と言いつ放たれた一言で、恐慌状態に陥っていた生徒達が静まる。

楯無は周囲の生徒達を睨みつけた。

「女性が男性よりも偉いからだから助けなさい? 今はそんな言ってる場合じゃないでしょう。非常事態が起きたからと言つて直ぐにパニックになつて他人任せ、責任の押し付け合いをするなんて偉い偉くないの前にあなた達は人間として間違っているわ」

実に正論だった。皆返す言葉も無いようだ。今更自分達のやった事を振り返る顔をするにしても気まずそうに顔を晒す者がいるも楯無は続けて言う

「それにね。アリーナを見て、今こうして貴女達が騒いでいる間も一夏君は戦つてくれているのよ! それでもさっきの様な事が言えるかしら」

爆発音がるアリーナを指差しながら言う。

誰も反論出来なかつたこれは完全に楯無の方が正しかったのだ。

「ハア やれやれ」

達也は溜め息を吐いて歩き出す達也。

「達也君どこ行くの?」

楯無の問い掛けに立ち止まり振り返る達也。

「ここは俺がやるしかありません」

——アリーナ——

「うおー」

謎のISに斬りかかったがその攻撃は敢え無く躲された

「一夏っ 馬鹿！」

「ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっの」

とダメ出しを受けて居る一夏。

「鈴 あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つてところね」

とエネルギー残高を確認する。

一方の達也

「凄いわね」

と薫子が呟く

それは楯無も同様である。今ここにいる生徒達皆がきつと同じ気持ちになった。

目の前で起こっているその光景に啞然とする。

システムクラック用にIS学園のセキュリティシステムにアクセスしてあるキーボードを打つ達也。そしてその速さも規格外過ぎるのだ。さっきまでキーボードを打っていた整備科のエースの黛薫子と布仏虚も目を丸くしている。

「彼 結構規格外ですねお嬢様」

「たつちゃん。司波くんて、本当一体に何者なの・・・」

「ただの魔法使いだけじゃ無さそうね」

思わず『規格外』の扇子を広げて苦笑いをする。魔法が使える事は入学前に知って驚いたけどシステム操作まで精通しているのは予想外だった。

薫子や虚達二人より数倍も早くて確かな操作でシステムプログラムの奥へ奥へと入り込み、嚴重にもかけられたカウンタープロテクトを次々と難なくクリアして行く。

多数の生徒達が見守る中、達也が言い放つ。

「システム解除完了」

バシユンと閉ざされていた扉が解放されたのだ。

（何て早さなの。達也君が作業に取り掛かってそんなに経って無いのに。薫子ちゃんや虚ちゃん達整備科のエース二人が挑んでも解除出来なかったあの嚴重なプロテクトをたつた一人で、しかも数秒で・・・）

呆氣に取られている楯無達を差し置いて、本校に避難して行く生徒達を達也は無表情

で眺める。

「助かったわ！感謝するわ！」

「ありがとう。一応お礼は言っておくわ」

「あの、ありがとうね」

達也に感謝の言葉を述べて去って行く生徒を達也は一礼する。

取り敢えずこれで生徒達の安全が確保出来たわけだ。

「ありがとうね、達也君」

「いえ 礼には及びません」

と言いだ達也はアリーナに向かって行く。

達也がアリーナに向かって走っている

『一夏 男なら・・・男なら そのくらいの敵に勝てなくて何とする！』

箒の音がアリーナに響き渡る。

見ると箒が放送室の窓から身を乗り出しマイクを使って叫んでいた。

あまりにも予想外な出来事に達也、一夏、鈴の三人は戸惑う。すると不明機が箒に向け銃口を箒のいる放送室に向ける。

「逃げろ！箒!!」

慌てて箒のいる放送室に向かったが・・・

バシユーツ

一夏が放送室に着く前にレーザーが発射されてしまった。

「マズイ」

もうダメだ間に合わない！と誰もが諦めかけたその時・

ビューン！

「!?!」

突然ISから放たれたレーザーが消えたのだ。一夏が周囲を見渡すと観客席の方で達也が『トライデント』を展開していたのだ。そう達也は即座にトライデントを纏いシルバーホーンを展開して分解魔法『雲散霧消』を発動しレーザーを掻き消したのだ。

「達也!」

『達也か 濟まない助かった』

「ああ 気にするな」

「一夏 織斑先生からの指示だここからは俺がやる」

「千冬姉が、わ、わかった」

そして達也は精霊の眼『エレメンタルサイト』で不明機を見る。

(生命反応が無い！するとこのISは無人机か ならあの魔法を使うか)

「一夏、鈴お前達は下がれ。少し強力な魔法を使う」

「わかった（わ）」

一夏と鈴が後ろに下がり達也は少銃型CADを展開し無人機に照準を合わせる。そして

「ヘビィ・メタル・バースト 発動」

バーンツ

達也はリーナの戦略級魔法の『ヘビィ・メタル・バースト』を発動するそれは爆心地点から全方位かにプラズマ放射する系統魔法。

そして無人機に命中すると無人機の機体からプラズマを流れそして大きく爆発し辺りに爆風と大きな煙が立ち込める。

「な、なんて威力なのよ」

「すげえ」

『なんて奴だ・・・』

三人とも呆気に取られていた。

「無人機の破壊を確認 任務完了」

と達也は言う。

第17話

無人機を破壊し負傷した一夏は保健室で治療を受けていた。

保健室

「これでよし、はい 終わったわよ」

「ありがとうございます」

と保健医にお礼を言う一夏。

「軽い軽傷だからすぐに良くなるわ」

「ありがとうございます。じゃあ俺はこれで失礼します」

「お大事にね」

保健室を出るとそこには千冬と鈴と達也が居た。

「千冬姉、鈴、達也 どうしたんだ？」

バシーンッ

「織斑先生だ、まあいいお前たち今回はご苦労だった。織斑、凰、そして司波」

「いいことよ！」

「まあね」

「いえ」

「ところで司波」

「はい」

「あの時 お前が使った魔法だが今までのとは桁が違う威力だったぞ」

「そ、そう言えば」

「流星は織斑先生ですね。はい、あれは以前お話しした戦略級魔法の一つ「ヘビィ・メタル・バースト」です。」

「何！戦略級魔法だと！」

「へ、ヘビィ・メタル・何だ？」

と千冬はあれが話で聞いた戦略級魔法だと驚き、一夏は名前が上手く聞き取れなかったらしい。

「ヘビィ・メタル・バースト」は爆心地点から全方位にプラズマ放射する系統魔法です。重金属を高エネルギープラズマに変化させ、気体化を経てプラズマ化する際の圧力上昇を更に増幅して広範囲にプラズマを散撒くという原理です。上下に圧縮する形でプラズマ化し、電子を水平方向に円形に拡散させることで、原子核を原子核同士の電氣的斥力と電子との間に働く電氣的引力で高速拡散させ、その運動エネルギーで広範囲を焼き尽くすんです。」

「そうか!？」

「???」

千冬は納得するも後の二人はちんぷんかんぷんみただ。

「取り敢えずお前たち寮に戻っていいぞ」

「はい」

と言われ三人共寮に戻って行く。

——寮の廊下——

一夏と鈴と別れた達也は部屋の扉の前に来ると気配を感じた。

(誰がいる!)

と警戒しらが扉を開けるとそこには、

「お帰りなさい。ご飯にする? お風呂にする? それともわ・た・し?」

「なあ!!」

裸エプロン姿の更識楯無がいたのだ。

「更識会長何ですか? その姿は?」

「あら、裸エプロンよ」

「それは、見ればわかります。何故その格好でいるのかを聞いているのです。」

「新婚さん(ごっつん)」

と訳のわからない事を言う。

達也は焦った幾ら感情が欠落しても感情と生理現象は別物だ。だから達也は目のやり場に困った。

「うふふ。なんてね。実は水着エプロンでした。ガツカリした。」

「はあ？」

「ところで達也君、これどうかしら？」

「とてもよくお似合いです」

「そおお。ありがとう。」

達也は取り敢えず裸エプロンならぬ水着エプロンの楯無を褒めておく。

「もうちよつと、照れながら褒めてくれると言う事なかったんだけど」

と言われ達也は、

「ストレスが溜まつてるんですね」

と何を勘違いしたのかそう言った。

「ええー？」

「更識家の現当主にしてI S学園生徒会長そしてロシア国家代表とも成れば気苦労も多
いでしよう」

楯無は達也の言葉に意表を突かれた。

(何を勘違いしてるのかしら?)

「こんな所で立ち話も何だし、中に入りましょう」

「え、ええ」

取り敢えず楯無に言われ自分の部屋に入る達也

「でもね、達也君　こんな美少女を目の前にしてお話してるのに全然手を出す素ぶりもないのね。お姉さんガツカリ」

と『ガツカリ』の扇子を広げる。

「俺に、露出性癖はないんで、学園内で女性に手を出したりはしませんよ」

「え！えつとじやあ学園外だったら？」

と聞いてきて達也は楯無の耳元で、

「勿論、先輩の据え膳なら遠慮なくご馳走になります。」

「えええ／＼／＼」

と頬を赤くする。

「それより更識会長。そろそろ着替えたらどうですか？」

「え！ああそうね」

と我に帰り浴室で制服に着替える

「それで更識会長用件は何ですか？」

「うん、とりあえずね。今日の事はありがとうね生徒会長としてお礼を言うわ」

「いえ、礼を言われるほどのことじゃありません」

「もう、そんな事言っちゃて」

「それで礼を言うために俺の部屋に来た訳じゃないでしょう」

「あら、分かっちゃた。そうなの実は達也くんにお願いがあつて来たの」

「お願いですか？」

第18話

「それでお願ひとは何ですか？」

「実はね、妹の簪ちゃんの事なの」

「確か、四組のクラス代表で日本代表候補生でしたね」

「そう」

「それで妹さんが何か？」

「実はね、簪ちゃんには、専用機が無いのよ」

「ない」

「勿論、簪ちゃんの専用機は造られてたのよ倉持研究所で、でも突然その専用機が後回しになったの。それが世界初の男性IS操縦者一夏君の登場で簪ちゃんの『打鉄式』から『白式』に変更になったの」

「なるほど、それであの時整備室で機体の調整をしていたわけですか」

と更識会長の説明に納得する達也。

「それで何故俺にこの話を？」

「達也君に願ひているのは、簪ちゃんの専用機を作るのを手伝って欲しいの」

「何故俺に？俺に頼まなくても姉である更識会長が手伝えば？」

「あの不明機襲撃の時のシステム解除の腕を見込んでるの。それに私と簪ちゃん今ちよつと距離を置いてるの」

「!？」

達也は楯無から事情を聞いた。優秀な姉がいることによっていつも姉と比べられていることによつて楯無と簪の間に距離が出来てしまったのだと。達也は何処か昔の自分と深雪と境遇が似ていたのを思い出す。司波家に生まれたにも関わらず落ちこぼれとして召使いのような扱いを受け、妹の深雪からは疎ましく思われていた時期があった。

「わかりました。何とかしてみます。」

「本当！ありがとう達也君」

と達也は楯無の頼みを受けることにした。そして楯無は達也に用を済ませ帰つていた。

翌朝

教室

席に着いてホームルームが始まるのを待っていると織斑先生が教室に入ってきた。

「諸君おはよう。山田先生ホームルームの前に転校生の紹介を頼む」

「ええと今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「「「ええええっ!?」」」

となんと今日は転校生が来たのだ。そして皆驚いて声を上げた。

「失礼します」

「.....」

と教室に入って来たのは金髪で男物の制服を着た生徒と銀髪で片目に眼帯をしている背の小さい生徒が入って来た。

「二人とも代表候補生で専用機持ちなんですよ。皆さん仲良くして上げてくださいね」

「シャルル・デュノアです フランスから来ました こちらに僕と同じ境遇の方が二人いると聞いて転入してきました この国では不慣れなことも多いかと思いますが 皆さんよろしく願います」

「!?（このシャルル・デュノアさんの声七草会長と同じ声だと！しかし奴は本当に男なのか?）」

「「「キヤーーー!!」」」

と女子たちが奇声を上げる。

「三人目の男子っ！」

「しかもうちのクラス」

「×シャルもいいけど達×シャルも萌える」

などなど色々な声が聞こえる

「・・・挨拶しろ ラウラ」

「はい、教官」

突然姿勢を正しかかをとを揃える。達也は感じたこいつは軍人だと。

しかも、

「!? (こっちに至っては渡辺先輩の声だとー)」

と今度は風紀委員長の渡辺摩利の声をした転校生に驚く。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここでは、お前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

と気をつけの姿勢を取る。達也は間違い無く確信したこいつは軍人だとそしてラウラが千冬を『教官』と呼んでいたことから察するに奴と千冬は軍の施設で出会ったのだと。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

と自分自身の名前だけを名乗る。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

と山田先生に聞かれ素っ気なく返す。

するとラウラが達也の方までやって来て

「！貴様が——」

するとラウラは手を挙げ振り下ろしてくる。

すると達也は反射神経でラウラの右手首を右手で掴んで後ろに回し左手でラウラの

襟元を掴み床に押さえつける。

ドオオオオンと強く床に叩きつけられる

「ダアア！」

「何の真似かは知らないが君と俺は今日が初対面のはずだが？まさかとは思うがドイツでは、初対面の相手に平手打ちをするのが流行ってるのか？」

とラウラを押さえつけながら達也は言う。そしてクラス全員が驚いていた、達也がラウラを振り伏せたのだ。

「認めない……」

「??？」

「私は、認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

と達也の顔を見ながら涙目で言うラウラ

「何のことは、知らないが俺に兄も姉もいないが」

「何！貴様、織斑一夏では、ないのか？」

「俺は司波達也だ。一夏は隣の方だ」

と言われラウラは一夏の方を見る、そして司波達也と聞いて思い出した世界で二人目の男性 I S 操縦者にして魔法使いだと言う事を副官から聞いた事があった。

「やめないか！お前たち席につけ」

「はい 申し訳ありません」

「わかりました」

と織斑先生に止められ席に着く達也とラウラ

「では、ホームルームを終わる。各人着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で I S の模擬戦を行う。解散！」

と織斑先生が号令を言う

ホームルームが終わるとシャルルが達也に話を掛けてきた

「織斑一夏君と司波達也君だね。僕の名前はシャルル・デュノア。同じ男性操縦者としてよろしくね！」

「おう、よろしくな 俺のことは一夏でいいぞ」

「ああ よろしく 俺の事も達也でいい」

「うん よろしくね。僕のこと、シャルルでいいから、それにしても達也て凄いな、架空の産物と言われた魔法が使えるんだもん」

「いや、そんな事ないさ」

「そんな謙遜しちやて」

とシャルルと話す。

「マズイなあ」

と達也がシャルルの手を引っ張る。そして廊下に出ると三人目当ての大勢の女子がいた。

「あ、出てきた」

「本当だ」

「ヤベエ もう居る。達也！シャルル！走るぞ」

と言いつわろうとする一夏を達也が止まる。

「待て一夏。ここは俺に任せろ。二人共俺に掴まれ」

と言いつ二人は達也に捕まる。すると達也は二人を両脇に抱え窓から飛び降りた。

「オイオイ達也」

「いや〜」

「安心しろ」

　　と言いだ達は飛行魔法を発動する

「び、ビックリした！」

「す、凄いISも無しに飛んでいる、これが魔法なの」

　　そして地面に着地してアリーナに向かった。

第19話

達也と一夏とシャルルは達也の飛行術式で窓から飛び降りそのまま更衣室で着替えてアリーナに向かった。魔法を使ったにもかかわらず途中で女子生徒に捕まるなどで遅れた。

「遅い！とつとと列に並べ！」

と織斑先生にどやされる。三人

「随分ゆっくりでしたわね 達也さん スーツを着るだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「え！いやあ・・・」

「達也ーアンタ転校生にひっぱたかれそうになったのを返り討ちにしたて本当なの？」

「まあ あの転校生が俺を一夏と誤解したらしいからな」

「そうなの！一夏アンタあの転校生になんかしたの？」

「何もしてねえよ」

と質問攻めにあっていると

「静かにしろバカ共ー」

と怖い顔で威嚇してくる千冬

「では本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「はい！」」

「ちょうど活力が溢れんばかりの十代の女子もいることだしな 鳳！オルコット！」
と指名された。

「なっ なぜわたくしだ!?」

「なんであたしまで!？」

「専用機持ちはすぐ始められるからだ いいから前に出る」

「お前から少しはやる気を出せ 愛しい想い人にいいところ見せられるぞ?」

ドキーン

「やはりここはイギリス代表候補生わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ？実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの!」

何やら二人がなんか変なスイッチが入る。

「それで相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん こつちの台詞っ 返り討ちよ」

やる気を出した二人に千冬が声を掛ける。

「慌てるなバカども 対戦相手は」

「来たなー」

キイイーン

「ああああーっ！どっどいてくださいっ！」

と山田先生が悲鳴をあげながら落下して来た。

（仕方がない）

と達也はトライデントを纏い山田先生の元に飛んで行く。そしてシルバーホーンを展開して『障壁魔法』を発動させる。

「えっ？し、司波くん！えっ？ちよ？」

ドーーーーーン

と山田先生は障壁魔法に衝突し止まりゆつくりと下に落下するそして達也が山田先生をお姫様抱っこをしながら着地する。

「あ、ありがとうございます。司波くん／／／／」

「いえ、たいしたことではありません。」

と達也は山田先生を降ろす。

「／／／／くうなんと羨ましいことですの／／／／」

「いいな 私も司波くんにお姫様抱っこしてもらいたいな」

「私も」

とお姫様抱っこされた山田先生に嫉妬するセシリアと羨ましいがる女子達
「今のも達也の魔法なの？」

「ああ「障壁魔法」と言ってシールドバリアみたいなものだ」
「へえそうなんだ」

「ねえ 達也今のが達也の専用機なの？」

「ああ 篠ノ之博士が俺の為に作ってくれた専用機だ」

「し、篠ノ之博士に!!」

「何っ!」

と転校生のシャルルとラウラは驚く

「まあその辺にしておけ」

と千冬が割って入る

「さて、お前達さっさと始めろ」

「え?あの二対一で・・・?」

「いや さすがにそれは・・・」

と困惑する二人に千冬は笑いながら

「山田先生はああ見えて元日本代表候補生だからな」

「む 昔のことですよ それに候補生止まりでしたし・・・」

「安心しろ 今のお前たちならすぐ負ける」

と言われ二人に火がついた。

「手加減はしませんわ!」

「覚悟しなさい!」

「い 行きますっ!!」

そして三機は勢いよく飛んで行く

「さて そうだな・・・丁度いいデユノア」

「はい」

「山田先生が使っているISの解説をしてみろ」

「山田先生の使用されているISはデユノア社製「ラファール・リヴァイヴ」です。第二世代開発最後の機体ですがそのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので安定した性能と高い汎用性豊富な後付武装が特徴の機体です。」

シャルルが山田先生の機体の説明が終わる頃には、

ボタンキュー

二人はコテンパンにやられていた。

「状況終了します」

「くっとう・・・」

「まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんのよ・・・」

「凰さんこそ、それはこちらのセリフですわっ!」

二人が互いの問題点を指摘する中千冬が

「さて、これで諸君にもI S 学園教員の実力は理解できただろう? 以後は敬意を持って接するように」

「専用機持ちは織斑、司波、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。では七人ずつ六つのグループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやることいいな? では分れる」

と千冬が指示を伝え終わるとクラスの女子たちが一夏とシャルルそして達也にどつと押し返せてくる。

「織斑くんと一緒にがんばろ!」

「ねっねっ私もいいよね?」

「同じグループにいられて!」

「デユノアくんの操縦技術を見たいなー」

「わからないところ教えて〜」

「司波くん、手取り足取りレクチャーして」

「司波くんの魔法もつと見せて」

「一緒にやろうよ」

女子たちは三人に集まって残りの三人は除け者扱いだった。色々あつたが最終的にまとまった。

一夏班

「やった織斑くんと同じ班っ！」

「よかつた！」

セシリア班

「うーセシリアかあ・・・さつきボロ負けしてたし・・・」

「はあ・・・ちよつとねー」

鈴班

「嵐さんよろしくね あとで織斑くんのお話聞かせてよ」

デュノア班

「デュノアくん♡わからないところがあつたらなんでも聞いてねっ！ちなみに私はフリーだよ♡」

「私も♡」

ラウラ班

「・・・・・・・・」

達也班

「司波くんよろしくね♡」

「わーいわーいたつたつと一緒だよ」

とりあえず班はまとまった

第20話

「ええつと いいですかーみなさんつ これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は「打鉄」が三機「リヴァイブ」が三機です。好きな方を班で決めてくださいね」
「あ 早い者勝ちですよー」

と言われみんないち早く取りに行く。

「司波くんIISの操縦教えてっ」

「ねえねえ専用機つてやっぱいい感じ? いいなー羨ましいなー」

「なあ!」

と達也の班の女子がやたらと達也にくつついてくる。

(達也さんたら他の女の人にデレデレされて) ムッ／／

「各班長は訓練機の装備手伝つてあげてくださいっ 全員にやつてもらうので設定でフィッティングとパーソナライズは切つてあります。とりあえず午前中は動かすところまでやつてくださいねー」

と山田先生からの指示が降る。

「それじゃあ 一人ずつ I S の装備と起動そのあと歩行などをやろうか。まずはー」

「はいはいはい♡ 出席番号一番つ相川清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジヨギングだよー！」

と達也の手を握って自己紹介をする相川清香。

「ああ 相川さんは I S は授業経験だけだったな」

「あ うんそうだよー」

「じゃあ心配ないなあ、とりあえず始めようか。長話は時間を浪費するだけだし放課後は居残りさせられるだろう」

「それはまずいわね！よし 真面目にやろう！」

と早速訓練を始める。

「いいなー」 キャー

「うそー」 キャー

と周りの女子が騒ぐ

「気をつけてな」

「よーしよー」

と達也が相川をサポートする。

「よし、あとはそのままラックに合わせて足を下ろせばいい。後ろと下はハイパーセン

サーで視認できるはずだ」

「前向いたまま後ろが見えるって何か不思議ね 鏡と違ってそのままのがかえって違和感？」

「確かになっ」

「いいなー専用機持ちは好きにIS使える上に司波くんは魔法が使えて、私らは司波くんと違って魔法は使えないし乗れる時間も機会も限られてるし」

「まあ確かにそう言われると俺たち専用機持ちは恵まれているかもなあ。足は固定されたな？ 上出来だ」

「次は背中をラックに接続する」

「わかった やってみる」

「軸が合ったら、そのまま背中を預ける」

「ほーい」

ガチャーン

「腕のアーマーがアームを挟んだら自動でロックされる」

「うん」

「そしたら、パージしても大丈夫だ」

カシューー カシューー

「よっと」

「起動ならびに歩行 帰投練習終わり♪」

と相川清香の訓練が終了する。

「いや あのさコクピットに届かないんだけど・・・」

「あつ」

とコクピットに届かないことに気づくと山田先生が

「あーコクピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。ハンガーに設置した後には乗り込み易いようにしやがまないとダメですよー装着解除してしまうと動かせなくなってしまうので」

「仕方がないので司波くんが乗せてあげてください。空を飛べる魔法がありますし、抱っこして乗せてあげれば問題ないですね」ニコツ

「・・・分かりました」

達也は少し悩んだが仕方がないので承諾した。

「やったー♡」

「ラッキー♪」

とはしゃぐ女子

「では、司波くん抱っこして運んであげてくださいね」

「分かりました」

と達也は女子を抱え飛行術式を発動し訓練機に寄せ訓練を始めて行き全員がやり終える。

「午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので各人格納庫で別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように」

「では解散！」

と授業が終わり解散の合図が出る。

「達也、シャルル。着替えに行こうぜ！俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないし」

「ああ」

「ええつと・・・僕はちよつと機体の微調整をしていくから二人とも先に行って着替えてよ。時間かかるかもしれないから待つてなくていいからねっ」

「ん？いや別に待つてても平気だぞ？なあ達也」

「まあ俺は一向に構わないが（やはり怪しいなあシャルルの奴妙に落ち着きがない上にこの慌てよう）」

「いついいからいいからっ！僕が平気じゃないからっ！ね？先に教室に戻つててね？」
と拒絶する。

「お、おうわかった。行こうぜ達也」

「ん？ああわかった」

と二人は更衣室に向かった。

第21話

昼休みになり達也、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルの六人で屋上で昼食を食べた。しかし箒は不満そうな顔で一夏を睨む

「……どういふことだ？」

「ん？どうした箒？」

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？夏服で正解の陽気だな！」

「確かに昼間は暑く……いやそうではなくてだな……！」

「せっかくの昼飯だし大勢で食べたほうがうまいだろ？それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろうし！」

「そ　それはそうだが……」ぐぬぬ……

とそんな箒を他所にセシリアはムスツとした顔を達也に向ける

「はあ、せっかく達也さんと二人きりでお昼を過ごせると楽しみにしてましたのに、人が大勢いるので驚いているだけですわ」

「いや、一夏に誘われたから別に断る理由も無いからな」

達也は苦笑いをしながら言葉返す

「はい一夏 アンタの分っ」

ぱかっ

「おお 酢豚だ！」

「そつ 今朝作ったのよ。アンタ 前に食べたって言つてたでしょ？」

「ほお 中々なものだな」

と関心する達也

「なに？達也も食べたいの？」

とドヤ顔で聞いてくる。するとセシリアが咳払いをする。

「コホン コホンッ達也さん わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めましてこういうものを用意してみましたの よろしければおひとつどうぞ」

「そうか？それじゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。済まない鈴またの機会でな」

「いいわよ、待つてなさい」

と約束をして達也はセシリアが作ったサンドイッチを食べる。パクツ

(甘いなあ)

「どうかしら？」／／／／／

「中々独特な味だな」

「そうですか？では残りもどうぞ！」

と勧められた。達也は「雲散霧消」で余分な甘味を消して食べた。

「ええと 本当に僕が同席してもよかつたのかな？」

「いやいや 男同士仲良くしようぜ？ わからないことがあつたらなんでも俺たちに聞いてくれ IISは達也に聞いてくれ」

「まあ 同じ仲間が増えた方がこつちも気が楽だ」

と二人とも微笑んで言った。

「ありがとう 一夏も達也も優しいね」

「い いや まあ・・・」

「ふん」

一夏は赤面し達也は鼻で笑う。

「シャルルさんの部屋割りはまだ決まったのかしら？」

「おう、達也の部屋に決まったみたいだ」

「まあ 俺の部屋は同居人が居ないからな。空いている部屋の埋め合わせだろう」

「そつか まあ普通に考えたらそうよね」

「・・・」

箒が不機嫌な顔をしている。

「どうした？ 箒 腹でも痛いのか？」

「違う……」

「そうか　ところで箸そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが」

と一夏が言い箸が一夏に弁当を渡し一夏は弁当の蓋を開ける。

ぱかっ

「ほゝこれはすごいな！どれも手が込んでそうだ」

「確かに中々の出来栄えだ」

「つ　ついでだついであくまで私が自分で食べるために時間をかけただけだ」

「そうだとしても嬉しいぜ　箸ありがとう」

「ふ　ふん……」

そして昼間も終わり午後の授業も終わり放課後になって達也は楯無との約束を果たすために妹の簪が居るであろう整備室に向かった。